野良犬達の晩鐘

著者　鈴木延夫

目　次

まえおき　（二）
棄て犬モク　（三～十八）
怪獣バワウ　（十八～三八）
怪物ジョン太　（三九～六六）
愛犬モク　（六七～七二）
野犬の集団実験（七三～八二）
下北半島の野犬と山犬（八二～八四）
大学紛争の時代（八五～一〇三）
愛犬モクの世界（一〇三～一一九）
救世主アンディー（一一九～一三四）
愛弟子を救った二頭の犬（一三五～一四一）
アラスカで逢った野良犬（一四一～一五二）
極東ロシアの街角で（一五二～一五九）
大阪枚方野犬裁判（一五九～一六四）
結びの言葉（一六五）

まえおき

四十数年におよぶ私の動物研究生活の中で、今一番懐かしく思い出すのは様々な犬達との出会いと別れの歴史である。

ある者は大学の研究室や実験室で、またある者は自宅とその周囲で出会い、そして別れて逝った犬達がいる。

勿論、その中には自分で飼育した犬もいる。また、私が特殊な目的で付き合った、あるいは付き合わされた野良犬も含まれる。

そうした過去を振り返ると、犬達は私の拙い人生に大きな影響を与え、さらに多くの貴重な教訓を残して逝った。

七十歳を目前にした今、何故かそうした犬達の姿が感謝の気持と共に蘇る。果たしてそれが私の個人的な感傷に留まるのか、あるいはもっと多くの方々にとっても意味があるのか。さらに言うなら、私の胸に込み上げる様々な感動や悔恨の念が他の人々にも共感戴けるのか。その点は私にも分からない。

にもかかわらず、私は彼等と付き合った日々の記憶をここに書き残しておきたい。願わくは、私にとって忘れられない当時の記憶が読者の方々の感動や感銘を誘うものであって欲しい。

その勝手な期待を胸に、私はこの本の原稿を書き進める。

二〇〇九年一月十五日

著　者

野良犬達の晩鐘　第一部

棄て犬モク　その一　極寒の最中

昭和三十年代の中ころから、私は札幌市内の大学で心理学を学んだ。それからさらに、そこの大学院に進み、期待半分に失望半分といった曖昧な気持のまま、ネズミやモルモットを使った動物心理学の実験や研究にともかく没頭しようと思った。それと同時に、まだ二二、三の若さで、高校時代の同級生と結婚していた。

勿論、それには個人の内面的な事情や問題もあったが、本人のあまり意識しない部分で、難題難問からの回避とか自己逃避といった側面も拭い切れなかった。

しかし、どんな場合も人間の誤魔化しは許されない。天知る、地知る、我知る。本来、浮き浮き楽しかるべき新婚生活の中にあって、本人の胸には計り知れない暗雲が深く重く圧し掛かった。

（どれほど真剣にこれからネズミやモルモットの研究をつづけたところで、人間の本質を知る研究に繋がらない。だとしたら、どうするか、・・・・・？）

大学院生活が始まって約半年、北国の都札幌は晩秋から初冬へと季節を移し、やがて極寒の時期を迎えた。

暮から正月に掛けて雪は休みなく降り積もった。それに寒の時期を迎えると例年以上の寒さが加わり、石炭ストーブの煙がたなびく屋外はもとより、モルタル塗りの新築住宅の内部でさえ、トイレから台所まで多くのものが凍り付いた。

そんなある朝、自分の大学に向う私に一歩遅れて、妻も自分の通う女子大に

出掛けていった。その日、空は一面分厚い雪雲に覆われ、夜の厳しい寒さがそのまま翌日の朝から昼へと持ち越されていた。

バスと市電を乗り継ぎ大学に着いた私は、ともかく大きな石炭ストーブに火をつけた。しかしどれほど時間が経っても、古くて天井の高い研究室の中に温もりは広がらない。暖かいのはその鋳物のストーブの回りばかりで、そこから少し離れた窓の氷は一向に溶ける気配を見せない。

仕方なく、分厚いオーバーと毛糸の手袋をしたまま、そんな部屋の中で足踏みをしたまま、時間の経過に身を委ねる。とてもその状況では、専門書に手を伸ばすことも、はたまた新たな実験の準備に取り掛かることも不可能に近い。

北海道特有の粉雪が深々と降りつづく。一時間に二センチあるいは三センチ。雪が降り出すと一般に気温が上がるという話もあるが、その日はまさに例外中の例外。窓や壁を通り抜けて飛び込むその日の寒さには、手心を加えるという雰囲気もまったく感じられない。

すでに暗くなった夕方の五時過ぎ、余り意味のない一日を終えて帰宅の途に付く。

最初はシベリヤ街道と呼ばれる大学内の廊下を長々と歩き、正門前から出て札幌駅へ向う。そこから先は市バスに乗り、一本の路線の終点まで乗りつづける。

時刻は夕方のラッシュアワー。バスの中は帰宅を急ぐ通勤客でその日も溢れて返る。ただし、誰も口をきかない。聞こえるのは停留所毎の車掌の案内。

「次は〇〇、降りる方はいませんか？」

「はい、降ります。降ろしてください。」

そんなやりとりがあって約二十分、市バスは私の降りるべき終点に到着。すべての乗客がやはり無言のまま、バッグや鞄を抱えて車を降りる。

バス停のすぐ脇に木の電信柱があって、その高い部分に裸電球が一つだけ弱々しい光を放っている。日中の明るい時間帯なら、誰一人気付かないその電球。しかし、雪の降りつづく夕闇の中での存在感は計り知れない。

最後にバスから降りた私の足元で、硬く踏み締められた雪道からの悲鳴が始まる。いや、それは足元の踏まれた雪から出る悲鳴ではなく、様々な悩みや難題を抱える私達人間の孤独な呟きかも知れないか、とふと思う。

当時、バスや電車の通る道以外、公的機関による除雪という作業はまったくなかった。だから、人間の歩く道はすべて獣道と変わりなかった。誰かが一人新雪の上を歩くと、そこに足跡が残る。その足跡は次につづく人々の道標となり、やがて少しづつ細い道が浮かび上がる。

だが、山奥につづく多くの獣道同様、雪の上にでき上がった人道は凸凹が激しく、左右にもぶれて歩き辛い。

一段と厳しい寒さに怯えながら、それでもどうやら自宅の玄関先に辿り着く。そこに一つ小さな外灯が灯り、朝、女子大に出掛けた妻がすでに帰宅しているのが分かる。

「ただいま、・・・・・。」

玄関のドアーを開けて私がいつもの声を掛けると、玄関につづく八畳の居間のドアーが開き、

「お帰りなさい。寒かったでしょう。」

と妻がいう。

私はその夜、特別な事態が我家の中で起こっているとは思いもしない。ただ、その夜エプロン姿で私の前に立った妻の様子に不可解な想いが込み上げる。

「どうしたい、何かあった？」

雪まみれの長靴を脱ぎながら、そこで一言相手に聞いてみる。

「・・・・・・・・・・。」

意外や意外、その夜に限ってなにか謎めいた微笑を浮かべる妻から、なんの言葉も返ってこない。仕方なく、私より背の低い妻の肩越しに、広くもない居間の中を探ってみる。

居間の右奥、そこは我家の石炭ストーブがある場所。そのストーブはいつも通り赤々と燃えて変わりがないが、何故かそのストーブのすぐ脇の床には、黒いボールのようなものが置かれている。

「・・・・・・?」

一瞬、なにがなんだか分からない。ただ、さらによく見ると、それがただのボールなら大きさでいってソフトボール。大人の両手なら、すっぽり埋まるほどの大きさに過ぎないが、そのボールの表面はなにかの毛で覆われ、わずかながらリズミカルな動きもこちらに伝わってくる。

一瞬の当惑、それにつづく直感的答え。

(これは仔犬だ、・・・・・・!)

落ち着いてじっと観察しなければ、そんな答えは浮かばない。一点の紛れのない完全な黒い球。勿論、私の位置からは目も見えなければ尻尾も見えない。がそれでいて、床に置かれていたその球形から、生命の息吹が聞こえてくる。

「これ、どうしたの?」

「女子大の建物の玄関口に今朝棄てられていたのよ。」

「それでどうしたの?」

「皆、その場所を避けて通ってしまうの。でもこの寒さでしょ、あのまま放って置いたら、こんなに小さな仔犬なんて、すぐ死んでしまうわ。」

「だから、連れて来ちゃったというのかい。」

「ええ、そう。友達の綾ちゃんと話し合ってそうしたの。いけなかった。だっ

て、こんなに可憐で可愛いのよ。」

「・・・・・・・・・・・・?」

すぐ死ぬだろうという判断に間違いはない。ただ、目の前の黒い毛玉を見ている限り、可愛いのかどうか判断に苦しむ。取り合えず、そこから先の話を先に延ばし、二人だけの遅い夕食を始める。

八畳の居間にごく普通の四人掛けテーブル。椅子に向かい合って二人座ると、残る空間はあとわずか。だから、私の目と鼻の先でその仔犬は眠ることになる。

ストーブの上の薬缶から、噴出すような蒸気の音が聞こえる。それに重ねて、赤々と燃えるストーブから、独特の燃焼音も聞こえる。でも、仔犬は眠ったままその場所を動かない。

家の壁を通して、冷気が室内に忍び込む。唯一暖房されていた部屋でさえ、背中に突き刺してくるようだ。

棄て犬モク　その二　昭和四十年一月二十日夜

冬の北海道が寒いという話なら、日本人の子供でも知っている。しかし、そうした北海道の寒さでも、一月二十日前後の寒さを実感できる人は少ない。

真夜中の時間帯なら、外は零下十五度前後まで下がり、日中といえども、零下五度以上に上がらない。

地元ではその寒さをシバレルという。まさに食材の冷凍乾燥中にある巨大な冷凍庫に、街全体が包まれるといっても過言でない。

昭和の四十年当時、道北の稚内や道東の釧路では、この時期、室内の酒瓶や醤油のビンが次々に割れるという話が幾らもあった。勿論、そんなときは野菜も果物もすべてシバレ、漬物樽の蓋にできる氷など、一夜に五センチの厚さに

なる、という話もあながちオーバーな話だと笑えない。

妻が自分の通う女子大の構内で問題の仔犬に遭遇したのは、昭和四十年の一月二十日。その日は同じ極寒の時期とはいえ、例年より遥かに厳しい寒さが札幌の街を包んでいた。

積雪は二尺から三尺。空は一日中黒くて厚い雪雲に覆われ、凍て付く大地も硬い雪か氷の世界。だからもし、妻が仔犬にそのとき手を伸ばさなければ、この話など生れる筈もなく、後日、利口で賢い飼犬となったこの牝の仔犬の命も、その日間もなく同じ場所で終わった、と誰かがいっても異論は挟めない。

それはともかく、昭和四十年の一月二十日夜、その仔犬は眠りに耽った。私達夫婦の黙ったままつづける食事中はもとより、食事の後始めた妻の後始末さえ済んでからも、その姿は変わらなかった。

私は食事が終わると、物音を気遣いながら床に座った。その前わずか五十センチのところに、動かない毛の球があり、周囲のでき事とはまったく無関係に眠りつづける。

静かな夜だった。球形の一部からこぼれる小さくてリズミカルな呼吸運動。時々現れる深呼吸の動き。少なからぬ体表面のフケ。

ふと気付くと、私の背後に中腰の妻がいる。

「この仔犬、なにか食べたの？」

「ええ、最初は授業を止めて彩ちゃんと帰る途中。二人で喫茶店に寄り、そこでほぼ二人分のサンドイッチを食べさせたの。それからこの家に戻って、ハムに私の作ったご飯もやったわ。」

「それで、・・・・・？」

「ワンともいわず、ただ尻尾を振るだけだったけれど、私の出したものはすっかり平らげたわ。黙々とね、・・・・・。」

時計を見ると午後八時。目の前の黒い毛玉から小さな手足が伸びてくる。目を瞑ったまま、背中の部分をくの字に折り曲げ、さも寝疲れたという様子がありありと見える。

「おい、少しは元気になったか？」

私も自分の右の手を伸ばし二度、三度とそんな相手に触れてみる。

そうしながら、急に痛ましさを覚える。妻と仔犬の出会った場面が頭を横切り、思わず知らず、両目に涙も込み上げる。

右手で目頭を押さえる。息がぐっと詰まり、床に涙がこぼれる。頑是ない命、いたいけな姿。そんな日本語の素晴らしい言葉も頭の片隅に湧いてくる。

やがて、仔犬の両目がゆっくりと開き始める。その目がキョロキョロ動き出し、頭の位置をそのままにして、尻尾の先だけ小刻みに振れ出す。

「おいこら、無理することはないんだ。無理するなよ。」

思わず出てくる言葉は、乱暴そのもの。しかしそれは、無二の愛情や感動を表す男の言葉。普段なら、決して思い付かない私という人間の心がそこにある。

そんな私の掛けた言葉とは裏腹に、仔犬は立ち上がって身震い一つ。それから、床に座ったままの私の胸に、精一杯の力で飛び付いてくる。

「おいおい、止めてくれよ。そんなにしなくても、いいんだよ。」

しかし、口先と心の中はまったく別物。私は両手で相手を包み込み、その身体を自分の鼻先まで優しく持ち上げる。

仔犬のとても小さな両手が上下に動いて、私の頬の辺りを柔らかく掻きむしる。それと同時に、相手の鼻先もこちらにぐっと伸びて、舌先が私の顔をなめ回す。

その瞬間のごく自然な動きと姿。幼い命だけがもつ独特の匂い。そのすべては私にとって生来最初の体験だが、誰の解説も必要ない。姿や形こそ違え、幼

い命が大きな生き物に向って精一杯の命乞いをしているのだ。
「もう、それはいい。話は分かった。初対面の挨拶もそこまで、・・・・・・。」
自分の生き方に悩み、しばらく笑うことも微笑むことも忘れていた私。そんな私が今、腹の底から微笑んでいる。しかも、本人自身はそんな自分の姿や心に気付いていない。
妻が再び餌と水を与える。仔犬はそれに飛び付き、無言のまま食べ、かつ飲みつづける。
「こんなに可愛いんだから、飼ってもいいでしょ？」
「・・・・・・。」
どうせもう、相手が分かっていることだから、返事もしない。下手に返事でもしようものなら、この至福の世界や雰囲気が壊れてしまう。
午後九時、お腹を膨らませた仔犬が再び眠り込む。まだ二十を過ぎて間もない私達も、黙ってその姿を見守る。
カタカタとなる薬缶の音。夜遅くなってまた降り始めた屋外の粉雪。壁や薄い床板を通して忍び込む極寒の冷気。いつもなら苛立つそんな世界が、今夜に限って受け入れられる。
昭和四十年一月二十日。その一日一晩が、私の研究に突然新たな光を投げかけ、男の一生さえ決めてしまう糸口になっていった。四五年の歳月を隔てて、私はその一日の記憶が忘れられない。

棄て犬モク　その三　長引く昏睡

我家に来て二日目、モクと名付けたその仔犬は少しだけ目を覚まし、少しだけ水を飲んだ。またそんなとき、すぐ脇で自分を見守っている人がいると、モ

クは尾を細かく振り振り、懸命に相手の顔を舐め回した。
だが、モクは二日目に新たな餌を食べなかった。たとえそれが美味しい魚や肉であっても、モクは鼻さえ動かさなかった。トイレもほとんど行かず、丸くなって寝る以外、モクに動きはまったくなかった。
「おかしいね。どうしたんだろう、・・・・・・？」
「本当に変だわ。病気かしら、・・・・・？」
大学の研究室という特殊な環境でしか動物を見ていない私にも、疑問が疑問のまま広がるばかり。
「まあ、明日まで待とう。」
無責任といえばそれまでだが、どう考えてもよい考えが浮かばない。伸ばしたい自分の手を押さえ、終日黙って仔犬を眺める。
しかし、その状態が三日目の夜までつづくと、膨らむ不安に、もう黙ってはいられない。
「モク、モク起きなさい。目を覚ましてなにか言ってごらん。ワンワンでも、ニャンニャンでもいいんだ。そんなになにも食べないで寝てばかりいると死んじゃうぞ。」
本当に、そうかどうかは分からない。ただ、相手がそのまま死にそうで怖いのだ。
手を伸ばし、眠ったままの仔犬を両手の中に包み込む。そうすると、仔犬は一度背伸びはするが、なかなかもって、肝心の両目の方は開かない。
「貴方、そっとしておいた方がいいんじゃない。昨日、自分でも言ってたでしょう。」
「どうしても気になってね。自分の不安に負けちゃうんだ。だって、この愛らしい姿だろ、このまま死なれたらたまらないよ。」

いつもなら理屈ばかり並べて妻を叱り付ける本人が、自分の感情に溺れて憚らない。

その夜遅く、外の仕事が手に付かない私達の目の前で、感動的なでき事がとうとう始まる。

夜の十時過ぎ、まずストーブの脇に眠りつづけた真黒な毛毬から四つの手足が突き出され、眠ったまま小さい身体で精一杯の背伸びが起こる。それから、おもむろに両目が開き、目が覚めると同時に私に向って突然飛び付いてくる。

「モク、元気になってくれたのか。本当に大丈夫か、・・・・・?」

勿論、モクはしゃべらない。しかし、モクのそうした姿や動きに相手の答えが含まれている。

「おい、モクがとうとう飛び付いてきたよ。聞こえているかい、・・・・・?」

嬉しくて、思わず冷え切った台所で仕事中の妻に声を掛ける。

「えっ、本当、・・・・・!」

妻が急いで居間に現れ、両目を開けて私の胸に収まるモクの姿に驚いている。

「モク、よかったね。あのまま大学の玄関に置かれていたら、今のあなたはいないのよ。でも、よかった。ここがあなたのお家、もうどこにもやらないから、・・・・・。」

そういいながら、妻の両手が伸びて、私からモクを奪い取る。考えてみれば、それは当然。仔犬の救い主は妻をおいて外にない。お腹の少し大きくなり始めた妻と、この寒さの中で最初の飼主に棄てられていたモク。そんなふたりこそ、運命的な出会いの当事者に違いない。

「ところでどうだい。少しこの犬にご飯をやろうか。その準備の間に、モクを外に連れ出してトイレをさせるから、・・・・・。」

「大丈夫、今夜もまたとても冷えているわ。」

そういいながら、妻の身体は台所に向う。
再びモクを妻から受け取り、玄関から外へと場所を移す。晴れ渡った空に、無数の星、星、星。家々から立ち上る煙にも、その夜のまばたく星空は超越している。
「さあモクよ、トイレだ。」
消しようのない、あるいは消す必要のない喜びに浸りながら、私は仔犬を柔らかい新雪の中に降ろしてやる、
それでも、モクは驚かない。すべてを当然と受け止め、少し新雪の中を泳いでから、腰をかがめて放尿に入る。
凍て付く空から、ダイヤモンドダストの粒がゆっくりと落ちてくる。今から四十数年前のこと故、自家用車やトラックの音も聞こえない。無限につづきそうな静寂と天空の輝き。自然の造形は人知を超える。
もう一度モクを抱き上げ、室内に戻る。そこには妻が急いで用意したモクの食べ物と水があって、私達を待ち構えている。
「さあモク、餌でも水でも好きなだけとりなさい。遠慮はいらん、皆お前の分だから、・・・・・。」
その言葉は蛇足そのもの。床に下りてすぐ餌に飛び付いたモクの耳に、そんな言葉は届かない。
餌の入った皿はやがて真っ白。それからモクが水を飲み、最後はもう一度私に飛び付いて、約一時間の流れは元の状態に立ち戻る。
カチカチと鳴る柱時計の音。その音を聞きながら、私達夫婦はお互いの顔を見つめ合う。
（良かったね、もう大丈夫。）
言葉にならない言葉を、そんな二人が取り交わす。

しかし、後から考えると、それは大きな誤りだった。モクが私達夫婦の前で見せた元気な姿は、ただ単にその時だけの話。その夜から始まる次の三日間、昏々と眠りつづけるモクは、決して目を開けることもなく、日に日に衰弱の色さえ深めていった。

身体が細り、全身の毛から、輝きが完全に失われる。黒光りする毛毬に変わって、小さなボロ雑巾が姿を現す。しかし、私にできることはなにもない。

後日、大学の研究室で手にした専門書の片隅に、こんな専門用語と解説を見付けた。

飽食症候群、　これは極限に近い飢餓に追い込まれた動物が一気に大量の食物を飲み食いした場合に起こる現象。その期間は様々だが、この症候群に陥ると飢餓からの回復が大幅に遅れるか、時には死に至るケースもある。

人間の感情に溺れた浅はかな行為、もしくは単純すぎる好意の怖さ。私はあのときの無知だった自分の姿に、幾度となく冷や汗を流し、齢六十数年の日々を生きて、今に至る。

棄て犬モク　その四　愛犬モクの誕生

再び昏睡状態に入ったモク。身動き一つせず、こちらが声を掛けても応えることのない仔犬が、居間の隅の定位置から動かない。その姿にやはり怯え、不安を抱えながらの毎日がつづく。

「モク、夕方まで出掛けてくるけど頑張ってね。」

女子大に通う妻は、毎朝そんな言葉を残して家を出る。口にこそ出さないが、

その思いは私も同じ。

（せめて夕方戻るまでは生きていてくれよ・・・・・・。）

そう念じつつ、私も自分の大学に毎朝向う。しかしそれはもう、抜け殻の習慣。大学に出たところで、ゼミや講義はすべて、付き合いの域を決して出ない。

一月二七日、その日も夕方まではいつもと変わらず。重い足を硬い雪に取られながら、夕闇に追われて自宅に戻る。そんなとき、不安こそあれ、期待などまったくない。

「ただ今、・・・・・・。」

「あら、お帰りなさい。今日は早かったのね。」

「とくに早くもないさ、・・・・・・。」

自分の沈んだ声に比べ、妻の声がどこか違う。そんな気がして、ふと顔を上げる。

「モクはどうしている、・・・・・・？」

「中に入って自分の眼で確かめてみたら、・・・・・・。」

そういう相手の顔に例の奇妙な微笑が見える。それは妻がモクを突然連れ帰った丁度一週間前の、あの笑顔とどこか似ている。

ところが、長靴を脱いで居間に入ろうとすると、今中に入れといったばかりの妻が行く手を遮り、私の邪魔をしながら笑っている。

（なにか理由があって見せたくないのか、あるいは逆に見せたいのか？）

一瞬考え、それも無駄だとすぐ思って、相手の肩越しに中をのぞく。しかし、中の様子は朝出掛けたときと変わらない。石炭ストーブがいつも通り燃えていて、モクの眠り込んだ姿も居場所も変わらない。

ただ、そんなモクでも、どこか身体の毛並みに輝きが浮かんでいるような気もする。

「モク、ただ今。元気が出てきたかい、・・・・・・?」

と、そのときだった。目を開く筈のないモクの真黒な両目が開き、すぐに立ち上がり、そして私の足元に元気一杯の姿で飛んできたのだ。

「モク、・・・・・・・・・・・・!」

左手の鞄を投げ捨て、両手を伸ばしながら、そんなモクを抱き上げる。

私の鼻先に、モクの小さくて真黒な鼻先が触れる。それと同時に、仔犬特有の匂いに包まれ、相手の手足と口が私の顔や頭の上で暴れだす。

体重ならわずかに五キロ。暴れなければ軽々と片手で持てる。そんな小さな生き物が、精一杯の喜びを私にぶつけてくるのだ。

その瞬間、何故、どうしてという疑問さえ湧いてこない。相手の無邪気な姿が無駄な言葉を押さえ込む。

しばらく、本当にしばらくの間忘れていた感激の涙。その涙が勝手に溢れて止まらない。その顔を、モクの可愛い舌が這い回る。

これは再会のときの他愛ない戯れの一つなのか。あるいは、仔犬が主人と交わすとても大切な初対面の挨拶なのか。

仔犬にとって、また私達若い夫婦にとって、神から与えられる祝福なのか。神をまったく恐れず、神を神とも思わない人間をも、神は慈しみたもうのか。

ふと、頭の片隅にそんな思いが浮かんでくる。適当にして勝手、私は多分そんな日本人の一人なのだとつくづく思う。

棄て犬モク　その五　利口な仔犬

モクが元気になると同時に、我家の雰囲気も突然変わった。まず、研究に行き詰まり、その不満感や苛立ちを大学から自宅に毎日持ち帰っていた私が変わ

った。

大学にいる間はともかく、夕方大学の重苦しい研究室から一歩外に出ると、何故か私の頭にすぐモクの可憐な姿が浮かんでくる。

（あいつは今、我家でどうしているかな。寝てるのかな、それとも起きて人待ち顔でもしているのかな。私が玄関に戻ったとき、あいつの可愛い鳴声が聞こえるだろうな。）

札幌はそのとき極寒の最中。毛糸の靴下に長靴、頭に毛糸の帽子。身体には分厚いオーバーを当然羽織る。それが当時、札幌に住んでいた人々共通の姿。

またその上、吹雪が吹き抜けるような夜であれば、人々はさらに頭も手足も縮めて帰宅を急ぐ。足元を見詰め、行き交う人の姿も顔も確かめず、ただ、ひたすらに先を急ぐ。

ただ、外見こそ同じでも、モクの存在を思い浮かべる私の心は明るさ一杯。楽しくて、わくわくして、帰宅の瞬間の情景に胸も心も弾んでいる。

例によって、市バスの終点から自宅の玄関へ。そこでわざわざ一息の間を取り、次は右手を伸ばしながら玄関のノブを右に捻る。そのわずかな音に、内側から元気な反応が巻き起こる。

「ワンワン、ゴリゴリ。」

「帰ったよ。」

家の中には先に戻った妻もいる筈だが、私の帰宅の挨拶に、妻への部分は含まれない。すべてはモクだけ。

「元気にしていたか。悪戯はどうした？」

「ウー、ワンワン。」

「あら、お帰りなさい。寒かったでしょう。」

「まあ、いつもの寒さだね。ところで、君が戻ったときの様子はどうだった？」

「あ、そうそう。私が一時間前に戻ったとき、モクがどうしても外に出せ、というの。仕方がないから、相手のいうようにベランダから裏庭に出すと、外の雪の中に飛び出したモクが、長々とまずオシッコをして、次に場所を変えると今度はウンチ。こんなに小さな仔犬がこれほどお尻の始末がいいなんて、思いも期待もしてなかったから、驚いちゃったわ。」

「そうかい、そうだったのかモク。お前って偉いヤツなんだね。」

夫婦の会話がそこまで進む間もなく、モクはすでに我が腕の中。いつも通り、小さな前足を私の顔に添えながら、急なピッチで舐め繰り回す。

やがて夕食。四人掛けの椅子に夫婦が座ると、その足元にモクもきちんと座っている。勿論、それは人間が教えた仕草でない。本人が勝手に考え、ただそうしているに過ぎないのだ。

「モク、お前は本当に素晴らしい仔犬だね、・・・・・・!」

私が思わず声を掛けると、腰を半分浮かせた姿で、モクは私の膝まで伸び上がる。

「よし、よし。じゃ、お前にも席をやろう。ここにしようか。」

そんな愛しいモクを抱き上げ、三つ目の椅子を引いてモクを乗せる。

ところが、椅子に乗せてもらったモクの姿がまたなんとも言えない。鼻の先こそテーブルの上にほんの少し覗いているが、首から下は非の打ちどころもない見事なお座り。これには、すぐ脇で見ていた妻が唖然としている。

「賢いわね、・・・・・・!」

それは妻の一言。勿論、それに加える言葉を私も知らない。一月末の札幌の夕べ、我屋を埋め尽くす冷気さえ、今夜は何故か気にならない。

怪獣バワウ　その一　怪獣バワウ登場

北海道にはかって「蝦夷の梅雨」という言葉があった。通常、北国の北海道には本州の梅雨らしきものは存在しない。ただ、十年に一度か十五年に一度、春の半ば過ぎから延々と冷たい雨が降りつづく年もたまにある。

昭和四十年の春はやはり本州に比べて遅く、四月の終わりになっても残雪が至るところに見受けられた。

大地に降り積もった雪がある限り、私達夫婦は本人の要望に応えてモクの外出を許した。ベランダの戸を開き、百坪ほどの裏庭に出してやったのである。

そんなとき、モクが外でやることはいつも同じ。長々としたオシッコに、場所だけ少し変えたウンチ。我家にきた当座のモクはいつもそれだけで室内に戻った。

しかし、少し成長した四月ころから、モクの外出には本来の目的以外に遊びも伴い、その時間も段々長くなり始めた。その上、四月の雪はどんどん消える一方で、ひどい汚れも目立ち始める。

すると、外出から戻ったモクの身体も汚れに汚れて、とてもそのままでは家の中に入れられない。そこである日、私はそんなモクのために三角屋根の小さな犬小屋を作った。つまりそれは、モクの身体が乾くまでの待避所という訳である。

五月のゴールデンウイーク、どうにか遅いサクラの季節がやってきた。しかし、外気はやはり冷たく、その上長雨も繰り返し降りつづいた。

そのころ、一旦外出したモクは用事を済ませて遊び呆けた。ときには家の周りから姿を消し、三十分から一時間後になると、泥だらけの姿で自分の犬小屋に戻ってくるようになった。

そんなある五月の雨の日の午後、少し前に外出した筈のモクが、裏庭の中で悲しい声で泣いているような気がする。そこでふと立ち上がり、モクの姿を追って裏庭を見ると、雨に濡れ細った仔犬の姿がそこにある。

「モク、どうした？」

私にはすべてが不思議で、理解出来ない。だから、本人相手に聞いてみた。が、当然といえばそれはそれまで。モクに人間の言葉は話せない。聞いた方が馬鹿なのはいうまでもない。

「モク、一体どうしたんだ。早く犬小屋に入りなさい。この冷たい雨にそのまま濡れていたら、すぐ病気になるぞ。」

蛇足ながら、敢えて私は言葉をつづける。

しかし、やはり返事をしないモクの様子になにか言葉が隠されているように思える。そこでもう一度声を掛けながら、震えの止まらなくなったモクの目線の方向に注意を向ける。が、そこにあるのはモク用の犬小屋ばかりで、不信に繋がる変化はどこにもない。

だが、濡れ細ってしまったモクの目線は自分の犬小屋から動かない。

（なにかあるぞ、きっとあの小屋の中がおかしい、・・・・・？）

そう思いつつ、玄関から長靴を履いて裏庭に出る。

手製の犬小屋は本当に小さい。中型の日本犬といわれるアイヌ犬なら、手足を伸ばせば前足の半分は南向きの犬小屋の外に出てしまう。だから、その小屋の中を調べるといっても、ちょっと覗けば何かが分かる。雨が中に漏っているかどうか、それ以外、考えられることはまったくない。

そう思いつつ、私も自分の腰を屈めて覗き込む。

犬小屋の手前半分は普段と変わらず。少し濡れてはいるが、モクに文句を言わせるほどもひどくない。ただ、奥の半分がとても暗くて分からない。

立ち上がり、小屋の後ろに回って軽く叩く。それには特別な意味も理由も含まれない。ただ、困り切った姿のモクの手前、黙って帰る訳にもいかないのだ。

と、そのときだった。目の前の犬小屋の中から、腹に響くような唸り声が聞こえてくる。決して大きな声ではないが、どこかドスの利いた、恐ろしげな声が聞こえるのだ。

驚いた。私も雨に濡れながら、ただ呆然と立ち尽くす。

あってはならないこと。そういうことはある筈がないこと。なのに、不可解なことが目の前にある。

（どうする。どうかしなければ、・・・・・？）

そこは我家の庭の中。しかも、その小屋は私がモクのために作った苦心の労作。なのに、私でもなくモクでもない新たな住人が、偉り腐って居座っている。

「おい、お前は何様なんだ。ちょっと顔を出せよ。言い分でも聞こうじゃないか、・・・・・。」

ヤクザでも使いそうな荒いセリフが、何故か口からほとばしる。

もうそのころになると、私に怯えはまったくない。ただあるのは、姿の見えない相手に対する、正真正銘の怒りと苛立ちばかり。それにしても、小屋の中から聞こえる何者かの唸りは鳴り止まない。

そこで腹が立った私は物置に走って垂木を探す。それから再び犬小屋の脇に戻って、その垂木の棒を振り下ろす。

最早そこには、知性も教養の欠片も見当たらない。ただ、感情の爆発があるのみ。可哀想なモクのためではなく、自分自身の高ぶる感情が私を動かす。しかしそれでも、姿をまったく見せない相手の唸り声は止むことを知らない。

右手にもった垂木の棒を一旦降ろし、下唇を咬みながらまだ見ぬ相手を睨み付ける。そうしたところで、目の前の事態は一向に変わらない。

そこで最後の手段を思い付く。急いで家に立ち戻り、ストーブの上にある熱い薬缶をもつて、再び現場に立ち戻る。

「さあ、どうしても出て来ないなら、このお湯を屋根の上からぶっかけるぞ。」

その言葉と共に、私は屋根からお湯を掛ける。その姿や態度や言葉使いを、誰か近くで見る人がいれば、クスクス腹を抱えて笑うだろう。しかしそのときに限って、私の姿は愚かそのもの。人に見られることすら、すっかりどこかに忘れている。

なにが利いたのかどうか、やがて小さな犬小屋の出口に、問題の相手がゆっくりと姿を現す。ところがどうだ。その姿たるや、そんじょそこらでは見掛けない。犬は犬だが、小柄な身体の前に付いたアンバランスな顔と頭。

身体の半分か三分の一はありそうな大顔。その形は典型的な長方形。小さな目を包む顔の毛は荒々しく逆立ち、ちょっと開き掛けた口からは馬の歯型が並んで見える。

（これは小さな怪獣だ、・・・・・・！）

私は心底そう思う。しかしそのころになると、私の胸からあのすさまじかった怒りも消えうせ、黙然と相手を眺める自分がそこにいる。

やがて、その怪獣もゆっくりと小屋を抜け出し、悠々とどこか遠くに歩き去る。それでようやく、くだんの問題は解決。冷たい雨にすっかり濡れ切った身体を引きずり、頭を垂れて家に戻る。

あれから間もなく半世紀、後日バワウという奇妙な名前で呼ぶようになったあの犬のあの歯並びが幾度私の記憶に蘇ったことか。決して犬に相応しくないあの馬の歯並び。野生動物研究者の一端を汚して今日に至る私にも、何故そんな犬がかっていたのか。答えはまったく分からない。

怪獣バワウ　その二　不可解な怪獣

怪獣バワウに翻弄されて数日後、日曜日の朝庭を見ると、何故かそこにバワウもいて、のんびりと昼寝に余念がない。だが、その姿を見た途端、私の怒りが蘇り、大声を出して叫びたくなる。

急いで鍵を外し、ベランダの戸を開ける。しかし、地面に丸くなって眠るバワウの様子は変わらない。慌てる訳でもなく、こちらを威嚇するのでもなく、ただひたすら安眠を貪りつづける。

その安らかな姿に、私の怒りは一気に萎む。風船から空気が抜けるように、せっかくの勢いもどこへやら。自分が何故ベランダの戸を開けたのかすら、本人も分からない。

「おい、お前は今日、なにをしにきたんだ？」

気が付くと、私の口からそんな優しい言葉が聞こえてくる。

すると、やはり異様な風貌のバワウが立ち上がり、尻尾を振って近付いてくる。

身体の半分を占める大きな顔。その長方形の顔を取り巻く直毛の硬い毛と小さな目。足が極端に短く、その分だけ胴の長さが気に掛かる。

しかし、明らかな好意を示し、尾さえこちらに向って振る相手なら、今更追い払うことなど思いも付かない。

一旦ベランダの戸を閉め、玄関に回って下駄を履く。裏庭には朝早くから外出したモクもいる筈だ。ここはなんとかモクの安全を確かめ、まだ幼い仔犬の生活を守ってやるのが飼主の役目。そう思いつつ、玄関から裏庭に回る。

「おい、お前は何者だい？」

そういいながら、ゆっくりと歩を進める私。その姿を見て、短い尾を振るバ

ワウも穏やかな態度で、こちらに近付く。
私は膝を折り、相手に向って手を伸ばす。その手に、バワウのざらざらした毛の感触が伝わってくる。それに加えて、乾いた泥の感触も否めない。
腰を下ろし、もう一度よく相手を見る。ふざけて描かれた漫画の絵が、そこにいる。身体は決して大きくないのに、骨太の威圧感が否めない。
体格は明らかに、日本犬の柴犬に近い。体重なら十二キロから三キロ止まり。その程度の身体をしながら、何故こうも威圧感があるのか分からない。
極端に短い尻尾を振る様子からすると、相手に悪意や反感の思いはなさそうだ。むしろ、我家の飼犬モクと比べても、相手の好意的な姿や態度は引けをとらない。
先日のやりとりが頭にあるから、そうしたバワウの態度はどこか理解の範囲を超えている。超えていながら、目の前の現実は互いに反目した過去の記憶さえ否定しているような気がしてならない。
私は左手でちょっと頭を掻き、右手はバワウの頭に置く。
(これをどう解釈したらいいのか、・・・・?)
目線がしばし空間に漂う。今日の札幌は綺麗な青空。その青空に免じて、バワウの奇妙な性格を考えるのは止めにする。
「おい、なにか犬の喜びそうな食べ物はないだろうか?」
ベランダのガラスの入った開き戸に向って声を掛ける。それに対する妻の答えは、すでにその右手にもつた一本の魚肉のソーセージ。
「そうなると思っていたわ。」
妻の答えは明快そのもの。ただ、そのとき妻の顔に浮かんだ微笑には、いささか顔をしかめる。
「バワウ、さあこれをあげるよ。遠慮はいらんぞ。」

ソーセージの皮を剥き、その一片を相手に差し出す。しかし、今朝の私は道化師そのもの。バワウの耳に私の優しい言葉は届かない。

バワウの態度はまさに無造作そのもの。私の言葉が終わるのを待たずに、問題のソーセージは跡形もなくなっている

ふと気付くと、そんなバワウの脇にモクがいる。その、きちんとお座りした姿勢がやはり可愛い。

「そうか、お前もいたんだ。ごめん、ごめん。さあ、これはお前の分だ。」

私はもう一片のソーセージをモクに渡し、頭をなぜて機嫌を取る。その間に、バワウも立派な姿勢でお座りを始める。

改めていうまでもなく、私は動物心理学を目指す大学院の学生。だから、どこに居ても、動物のやることにはすべて何故かとか、どうしてそんなことをするのか、気になって仕方ない。だが、怪獣バワウの見せる様々な動きや表情に、どうしてと問うこと自体が馬鹿らしい。

すべては不可解。相手は怪獣にして怪物のバワウなのだから、・・・・。

怪獣バワウ　その三　荒縄と野球ボール

いつも通り、家の中で静かに一夜を明かすモクは、私達夫婦が起きるのを待ち構え、すぐトイレだ、トイレだと騒ぎまくる。それに応じて、私達はベランダのガラス戸を開き、モクの外出を見送る。

我家に妻が棄て犬のモクを連れ帰った一月当時、モクの年齢は推定で生後二ヶ月。しかしそれも、五月を迎えるようになれば、モクはすでに生後六ヶ月。となれば、外に一旦出た後の遊び方も変わってくる。

モクは最近、外出と同時に私達の視界をはみ出す。裏の民家を回って、その

あとは分からない。しかも、最初はトイレに限られているモクの外出も、今ではどうやらただの口実。本音は外で自由気侭に遊びほうけたい、ということのようだ。

しかしそうなると、一旦家から出した相手がいつ自宅に戻るか分からない。だから、私達夫婦も、最早モクの帰還をじっとは待たず、ベランダのガラス戸などはすぐ締め切って自分の生活に戻る。

そんな日々の中で、外出したモクの様子を時折裏庭に探ると、当人に替わって、何故か毎日、バワウの元気で陽気な姿がそこにある。

「おい、バワウお早う。」

とか、

「おい、バワウ今日は天気がいいね？」

とか、そうでなければ、

「おい、バワウ。モクの姿がしばらく見えないけど、お前モクの様子を知らないかい？」

と言って話し掛ける。

そんなとき、我家の庭の土の上で寝そべったり、休んだりしているバワウは、薄目を開けながら短い尻尾を左右に振る。ただ、相手のバワウから戻る挨拶はそれがすべて。あたかも、それは、

（今は眠くて疲れているから、放っておいてよ。）

と言わんばかりだ。

本来、他人に命令されたり反抗されるのが嫌いな私は当初、その態度に腹が立った。が、家の中から少し離れて見る相手の姿には、どこかにいつも愛嬌が溢れていて、バワウに限って怒れない。

（まあ、相手は怪獣。ここは一歩下がって、バワウに付き合うことにするか。）

それは私が出した結論。相手に備わった野良犬の気魄に負けた、と言えるのかどうか。当時も今も、判断に苦しむ。

そんなある晴れた日の午後、私達夫婦はモクの首輪に買ったばかりの綱を付け、近くの川原まで散歩に出掛けた。ところが、家から出て間もなく、あらぬ方角からバワウが現れ、モクの綱を齧って離さない。

「おい、バワウ。どうしたんだ、お前、・・・・・?」

余りにも唐突な話で、私にはその意図するところが分からない。かといって、本人のバワウから、人間の言葉が聞けるかとなると、その方がもっと難しいのは分かっている。

仕方ない。駄目を承知でもう一度、小さいながら馬の立派な歯並びを見せる相手に聞いてみる。

「バワウ、それはなんの真似だい。それとも、どうかして欲しいのかい?」

がそのとき、頭の片隅に何かが走った。

(多分、これだ。この綱が問題なんだ!)

そう思った途端、私はお腹の大きくなり始めた妻にモクの綱を渡し、

「ちょっと待って、家に戻ってバワウの綱になりそうなものをもってくるから。」

と言って、自宅に戻る。

時間にして五、六分。我家に戻って、約一坪の物置を掻き回す。しかし、最初からないものはないのだ。そこにあるのは、家を新築したときの半端木ばかり。後は長さ十メートルから十五メートルの荒縄。

(これでも仕方ないか、・・・・・。)

そう口の中で呟きながら、元の場所に駆け戻る。

「貴方、それはちょっとひどいじゃない、・・・・・。」

長い荒縄を引きずる私を見て、今度は妻が笑い出す。
「しかし、家にないものはないんだ。これをバワウが拒否するなら、それはそれまで。後は勝手にしてもらうだけだよ。」
「ところでバワウ、この荒縄でお前の首輪と引き綱にするけど、それでいいかい、・・・・・・?」
デタラメな私の思い付き。しかし、こちらの不安を他所に、本人のバワウは至って平気。すぐそれまでつづけていた行為を止めて、バワウが私の手元に飛び付いてくる。
かくして、二人の人間と二匹の犬の不思議な行進が始まる。だが、恥ずかしさをこらえたその行進の開始直後、事態は新たな方向に展開していく。
「パパ、あそこを見て。あれ危ないわ。」
私の肘を掴んで歩く妻が、また奇妙な笑い顔を浮かべてそっと囁く。
「えっ、何がどうだって?」
「あのキャッチボールよ。貴方、家の裏庭に最近、沢山ボールの転がっているの見ているでしょ。あの犯人が多分、バワウなのよ。」
そう言われてみれば、子供達がよくやる軟式野球のボールの他にも、古いソフトボールが幾つも転がっていたのを思い出す。
我家の玄関からバスの通る市道を挟んで、小さな児童公園がある。形は正三角形に近く、それに沿って市道は逆L字型に曲がっている。
私達二人と二匹の奇妙な一団がそのL字に沿って歩き始めると、キャッチボールに興じていた大人から子供までが声を出して笑い転げる。確かに、そうなるのは初めから分かっている。
誰もが可愛いと言ってくれるモクの散歩姿は、私達が見ても一枚の絵になる。全身を包む黒光りの毛。アイヌ犬というには少し身体こそ小さいが、ぴんと垂

直に立つその両耳。見事に巻き上がった可愛い尻尾。その上、まだ買って間もない散歩綱さえ、その日は春の陽光に輝いて見える。

だが一方、荒縄の一端を犬の首に巻き付け、その残りを長々と伸ばしたまま人間がもつという姿は、誰が見ても可笑しいに違いない。

その上、自分の姿に満足し切ったバワウの様子は言葉にならない。前半身より大きく見える独特の頭と顔。地面を這うように長く伸びたその胴体。

その奇妙な胴体を支える四本の短い足。さらには、垂直に立つわずか十センチの尻尾に全身を包むゴワゴワの毛ともなれば、笑うなという方が無理かもしれない。

しかし、今ここで野球をしながら笑い転がられては、やがて皆も困るだろうし、こちらも困る。

（ちょっとしばらく、ボールを手から離さないで下さい。この怪獣が皆さんのボールを狙っていますから・・・・・。）

私は大きな声でそう伝えたいと思うのだが、何故かその口が動かない。

先頭を元気盛んに進むバワウ。その後ろを歩く当惑気味の私達。でもやはり、危惧は危惧のままで終わらない。

L字の角を曲がった直後、目の前の道路の上で数人の大人がキャッチボールに余念がない。その姿を見た途端、怪物バワウの動きが突然変わる。

まず、先頭に立つのを止め、こちらを振り返って地面にだらしなく伸びた荒縄に咬み付く。それから、その荒縄を咥えたまま、こちらに向って歩いてくる。

（この縄、外して頂戴。）

彼はどうやら、その意志を伝えているようだ。だが、今ここでそんなことは出来ない。もしその結果が予想通りの事件にでも発展すれば、私達夫婦の立つ瀬がなくなる。

（駄目だよ、バワウ。そんなことできるかよ。お前、本気であのボールを奪うつもりだろ。止めてくれよ、それだけは、・・・・・。）

その会話は勿論、無言。しかし、そんな私の気持を素直に聞くような相手ではない。

犬と人間の交渉は最初から成立しない。それを理解したのかどうか、急にバワウの態度が変わる。それまで見せていた友好的態度を棄て、少々猛々しい姿で荒縄に咬み付く。

時間は掛からない。ものの十秒か二十秒。バワウの第一目標が即座に達成し、次の行動が開始される。

普段の姿からは予想も出来ないスピードで、バワウが走る。その前方では、こちらの変化に気付かない大人達が、ワイワイ声を出しながら、キャッチボールをつづけている。

（これは不味い、・・・・・・！）

そうは思うが、この場を無事に収める手立てもない。妻と目線を交わし、込み上げる不安と笑いを咬み殺しながら、急いで現場を離れる。

そうしながらふと脇を見ると、バワウが空中を行き交うボールに焦点を定め、いったりきたりの大騒ぎ。

君子危うきに近寄らず。

見ない、聞かない、思わない。

私達二人と一匹は先を急いで、川原に向う。

それから二時間後、あの場でバワウのもたらす結果を予想しながら、自宅に戻る。するとやはり、我家の裏庭には、新しい野球ボールが一つ転がっていて、バワウ本人の姿が見えない。

だがもう、バワウ本人からあの後の経緯を聞く必要もない。ボール一個の中

に、すべてが答えが書かれている。
「あの人達、きっと困ったでしょうね。」
「まあね。今日は日曜日だから、店も開いてないだろうし、予備のボールもなさそうだったから、野球はその場で中止だろ。気の毒だが、今更このボールを戻しにいく訳にもいかないよ。」
春の最中、冬を耐え切った札幌の空が、気持ちよく広がる。まさに屋外シーズンの到来。しかし、それを思えば思うほど、あの連中の苛立ちが伝わってくる。
午後遅く、犯人のバワウが裏庭に姿を現す。だが昼間、努力して奪い取った筈の野球ボールに、バワウはまったく関心を示さない。ゴロンと土の上に転がり、そのまま深い眠りに入りこむ。まさに、天下泰平ともいえる姿がそこにある。

怪獣バワウ　その三　突然の別れ

雪解けと同時に、バワウは突然、我家の仲間になった。そのきっかけこそ少々強引なやり方だったと思うが、結果は誰も喜んで受け入れた。だからそれからすぐ、彼と私達の愉快な日々が自然に始まった、といってもおかしくない。
ただ、その期間は余りにも短かく、その終わり方もまた、突然だった。
ある週末の夕方、我家の周りで時間が静かにゆっくり流れていた。読書に疲れた私はベランダの戸を開け、下駄を履いて庭に出た。するとモクが駆け寄って来て、胸の中に飛び込む。
「おい、モク。どこで何をしてきた？」
それは私達の今や習慣となったやりとり。特別な意味のない、単純な挨拶の

一つに過ぎない。

「最近、よく姿が見えないが、一体どこまで出掛けているんだ。」

そんな私の言葉にも、モクの反応は全身で喜びを現しながらの舌先攻撃。少々のことでは決して止めない。

「いい加減にしてくれよ。お前にそうされると顔が痛いし、突っ張るんだ。」

そう言いながら、顔を左右に動かす。

空は曇り、夕方に近付き、肌寒さがわずかに忍び寄る。それでも、穏やかで平和な時間がそこにある。自分の研究の行き先に不安こそまだ抱えていても、愛犬モクの存在がその場の雰囲気を明るくする。

と、そのときだった。突然、裏の茂みの方角から犬の遠吠えが聞こえてきた。

（・・・・・・・・・・・・？）

腹の底から搾り出すような声。未だかって、聞いたことのない不思議な声だ。

声のする方向に目を向け、その声の主についてあれこれ考える。しかし、どうしてもそれが誰か、どこの犬か分からない。

愛犬モクは家の中で寝ている。だから、この犬が唸り声の主ではない。が、我家の周囲で飼われている犬のリストを頭に浮かべて、一頭づつ考えてみるが、あの声に相応しい姿も名前も浮かんで来ない。

実に不可解な声で、その意味すら分からない。考えつづけても、自分で納得できる答えは見付かりそうにない。

（これは無駄だ、・・・・・・。）

そう考え直して、頭を切り替える。

時がやはり静かに流れる。近くの公園で遊ぶ子供達の声も聞こえない。そろそろ、日没が迫っているのか、辺りから昼間の眩しさはもう感じられない。

自分の研究に関連した専門書に、再び頭を集中する。学習心理学理論、スエ

ーデン人が英語で書いたものだ。なかなか面白いと思える反面、ごく単純な話を無理に厳しく書いているような気もする。やはり、これまでやってきた自分の研究分野には、なにかしら違和感が伴う。

時間が過ぎて、頭も目も疲れてくる。マッチで一本のタバコに火を付ける。それから頭を回して、窓越しに外の情景を眺める。

視野は狭い。左手と右手に近所の家が寄り添い、裏側には軒先まで我家の敷地に乗り出した少々忌まわしい一軒の家。その脇に雑草の茂みがあって、さらにその先は、高さ五メートルほどの雑木林の壁が立ち塞がる。

四年前、この土地を調べにきたとき、辺り一帯にリンゴの木が立ち並び、我家の予定地だった百坪の土地にも、まだ若い五、六本のリンゴの木が生えていた。しかしそれが今は、こんなに閉鎖的な世界に変わっている。

ふと、　外に向けた目が曇る。

（こんな筈ではなかった、・・・・・。）

そんな思いがごく自然に湧いてくる。とその時、裏庭の先の茂みから何かが猛然と飛び出してくる。その迫力、そのスピード。この世のものとは思えない。

「パパ、あれバワウじゃない！」

突然、背後から妻の叫びが聞こえる。振り向くと、椅子に座って本を読む私の背後に妻が立ち、同じ方向を見て叫んでいる。

「そうかい、あれはバワウかい。」

妻にそう言われる前から、私の頭にもそんな予感が浮かんでいた。しかし、私はこちらに向って猛進する相手の姿そのものに囚われ、それがバワウかどうかの確認さえ忘れていたようだ。

急いでベランダのガラス戸を開き、そこから身を乗り出して声を掛ける。

「バワウ、どうしたんだ。何があったか言ってごらん。」

それは少々混乱したままの私が、冷静さを失って口にした言葉。激しく動くバワウが今ここで返事をする訳のない、愚かな問い掛け。

それでも一瞬、バワウの動きが止まる。あのチンチクリンな四足で大地を踏み締め、覆い被さる顔の毛の中から、私の顔をじっと見上げる。

「バワウ、どうした。何かに追われているのか、・・・・・・・？」

いや、それもやはり愚かな問い掛け。あの怪物バワウを追い回す犬が、外にいるとは思えない。でも、それが犬でなければ、・・・・・・？

私の思案はまとまらない。その間を縫って、バワウの姿がまた変わる。

バワウが我家の壁に沿って回り出す。一回、そして二回。その姿の勇ましさ、猛烈なスピード。私達はただ呆気にとられ、開いたままの口も閉まらない。

「バワウ、止めなさい。そんなに走らないで、・・・・・・！」

建坪で三十坪に満たない我家は小さい。だから、バワウがそこを一周するのに掛かる時間もごくわずか。しかし、そのごくわずかな時間の中で、妻の鋭い勘が何かを捉えたようだ。

確かに、あの短すぎるほど短いチンチクリンの足を考えると、今目にするバワウのスピードは尋常でない。何かそこに、異常とも狂気とも言える姿がありそうだ。

「バワウ、もう止めなさい！」

そんな妻に倣って、私も同じ言葉を叫んでしまう。

振り返ると、妻の素顔に涙が流れている。激しく、止め処なく。その上、妻の嗚咽も止まらない。

思わず、その肩に右手を置く。しかし、諌める言葉も宥める言葉も浮かばない。

再び、裏庭に目を向ける。だが、バワウの姿はそこにない。音も聞こえず、

まったく別の世界が辺りに広がる。
妻が居間から台所に向う。私はベランダの開き戸を閉める。その間、私の足元にいた筈のモクは、室内の寝場所に戻って、目を瞑る。
やがて、台所から包丁の音が聞こえてくる。それからしばらくすると、居間のテーブルに夕食の準備が整い、
「さあ、食べましょう。」
という妻の声が耳に届く。
「そうしようか。」
私は珍しく素直に、そんな妻の呼び掛けに答える。
私達夫婦の短い会話の間に、モクはすぐ目を開く。それから皆に先駆け、自分に割り当てられた椅子に飛び乗る。
すべてはいつも通り。平和で穏やかな我家の夕食の風景。ほんの少し前に起こった出来事が、家族の意識から消えている。
それから二時間、時計の針が午後八時をすぎる時刻だった。外はすでに暗く、物音すら聞こえない。
「ごめん下さい。ごめん下さい。」
突然、誰か知らない女性の声が我家の玄関先から聞こえる。
「こんな時刻に誰だろう、・・・・・・?」
そう言いながら腰を浮かそうとする妻を押さえて、私が暗がりの玄関に向う。
「どなたでしょうか、・・・・・・?」
「近所の〇〇〇ですが、・・・・・・。」
「ああ、それはどうも。今鍵を開けます。」
少々慌て気味にドアーを開くと、暗がりの中に若い奥さんの白い顔が浮かんでいる。

「あの、お宅の犬だと思うのですが、今私の家の軒下で苦しそうに唸っています。助けてやって下さい。」

（・・・・・？）

普段、表通りで無言の挨拶しか交わしたことのない相手から、夜の八時を過ぎて訪問されることも、ましてやお宅の犬が、などと言われる理由は見当たらない。我家のモクなら、今は居間の中で寝そべっているではないか。そんな思いが胸に浮かんで相手に答えられないでいると、背後から妻の声が聞こえる。

「貴方、それはきっとバワウのことでしょう。ついさっき走り回っていた、あのつづきじゃない。」

そうか、そう言われれば思い当たる。

「奥さん、実はあの犬なら、我家の犬ではないのです。でも、少なからぬ付き合いもありますから、取り合えずお宅に伺いましょう。」

夏の最中のこと故、急いで下駄を突っかけ、奥さんの後に従う。

「私達が家の中であの唸り声を聞いていたのは五分か十分です。でも、余り苦しそうなので、お呼びに来ました。」

その言葉を片耳に、ともかく先を急ぐ。

我家から一軒置いた隣の家。建築業の下請けをしているというその家は意外に大きい。自宅の室内の一部に機材置き場が加わっているせいか、道路に面した壁だけでなく、脇に回った側面の壁もかなり広く、ましてその軒下となるとまったく光が届かない。

しかし、その場に近付くと、犬らしき者の唸り声が確かに聞こえる。

「バワウ、バワウかいお前は、・・・・・？」

声の聞こえる二、三メートル手前で立ち止まり、恐る恐る声を掛ける。

そのとき何故か、身体が竦む。腰が引け、それ以上前に進めない。

「バワウ、バワウ。お前なら返事をしてごらん。」
だがやはり、この状態で相手に返事を求める方が間違っている。そこで一度息を整え、思い直してもう二、三歩相手に近付づく。それから、おもむろに腰を下ろす。
私がそこに現れたせいかどうか、唸り声が静まる。しかし、相手の身体に手を触れたところで、暗闇の中では相手の素性も簡単にははっきりしない。仕方なく、一旦静かになったその相手を抱き上げ、ともかく暗がりを逃れる。
道路の上を照らす裸電球の外灯。その下に立つと、両手にズシリと伝わる相手が犬であること。さらに、その犬が間違いなくあのバワウであることも判明する。
「バワウ、苦しいのか。ともかく、我家に戻ろう。」
両手ばかりか、私の上半身まですっかり濡れた泥の感触が伝わる。が、そのときに限って、浴衣の汚れも気にならない。
我家に戻り、妻に言って布団を出させる。それをベランダの狭いたたきに敷かせ、その上にバワウの身体を横たえる。
バワウはもう、声をあげない。そして動かない。ただ、かすかな呼吸運動が腹の辺りにのぞかれる。
「バワウ、可愛そうに、・・・・・・!」
新たな嗚咽が妻から聞こえる。私は黙ってバワウの前に膝まづく。
それから約三十分後、バワウの呼吸も止まる。その姿を間近で見ながら、モクが黙って座りつづける。
私はモクの頭を撫ぜながら、目はバワウから吸い付くように離れない。
やがて、私の心は目の前の現実を離れ、回想の世界に漂う。
突然の出会いと突然の別れ。相手に翻弄されながらバワウを結局、憎めなか

った懐かしい日々。

わずか三ヶ月のやりとり。悪意なく人間の意志や好意を踏みにじる怪獣。いつ現れるかも、いつ居なくなるかも、すべてはバワウの判断次第。それでいて、決して我家のモクの餌に手を付けなかった野良犬紳士のバワウ。

「自分の餌は自分で探す。」

そう言い切って私を驚かせたあの怪獣。

(それでは何故、バワウは我家を訪れてきたのか、・・・・・・?)

あれから半世紀近く経った今も、私にはその答えが見付けられない。

怪物ジョン太　その一　モクの発情

バワウの夏が終わる。するとそのすぐ後から、北海道特有の早くて短い秋が始まる。

夏から秋に変わる最初の変化は、暖かい空気の中に混じる冷気。その冷気を肌に感じたとき、私達は秋の到来を予感する。

九月中ころ、北海道北部の稚内や道東の根室や釧路あるいは大雪山辺りから紅葉の時期が始まる。それは日を追って南下もしくは西上し、十月上旬には道央の札幌でも紅葉の時期を迎える。

私が大学院生として通う大学の構内は日本一広い。東西に一キロ余り、南北では約二キロ。一周すると、軽く六キロを超える。

その上、大学構内には昔から数多くの建物が散在し、その間や周囲に無数の樹木が立ち並ぶ。

有名なポプラ並木に銀杏並木。数からいえば、それらは大学構内に生える樹木のごく一部。人によっては大学の北側に広がる原始林の方がいい、という人もいる。

そんな樹木の中で、ポプラと楡の大木が私には印象的だ。百年または二百年。それらの木が育つのにどれだけの年月が掛かったのか、外見だけでは分からない。しかし、彼等の重ねた年輪の重さは、否応なくこちらに伝わる。

秋、そんな木々が紅葉の時期を迎える前から、落葉の季節が始まる。葉は緑のまま、そよ風に吹かれて舞い落ちる。

地面に薄く散り敷くそんな落葉の中に、やがて色とりどりの紅葉が混じる。丁度そのころ、大学構内を飾っていた様々な花の季節が終わり、冷たい雨のつづく本格的な秋の季節が始まる。

北海道に生きる多くの人々は、山桜や桂や楓が繰り広げる紅葉の季節の素晴らしさを知っている。ただ、私達北海道の人間に限って、その素晴らしい季節の背後から訪れる冬将軍の恐ろしさも、意識の底に感じている。

そんな秋の季節、都市から遠く離れた山奥では鹿やクマの交尾期が始まり、清水の流れる川の中では、サケやマス類の死を賭けた産卵が始まる。同じ時期、我家のモクにも、著しい変化が起こった。

小さい時から、モクの世界には私達夫婦と、妻の通う大学の女子大生の友達で、時折我家を訪れて可愛いがってくれる人間以外存在しない。だから、外の人も犬や猫といった動物も、モクは避けて通るか、いつも無視して暮している。

ところが最近になって、モクの様子がどうもおかしい。一旦庭から出ていくと、戻るまでに時間が掛かる。二時間や三時間は当たり前。ときにそれが、五、六時間に伸びることも例外ではなくなる。

「パパ、モクの様子おかしくない。おいで、と呼んでも生意気な顔をして、なかなか戻って来ないのよ。」

「うん、僕も最近そう思うことがあるよ。なんだろうね、牝犬の発情期ってやつかな。」

「あんな姿のモクなんて、私は嫌い。」

とはいえ、本人のモクだって、好きでそうしているのかどうか、分からない。確かに、そう言われてじっと観察してみると、モクは姿も行動も変わっている。幼い子供時代の可憐さや可愛さなど、今はどこにも見当たらない。その上、もっと奇妙なことがモクの周囲で起こっている。

一旦姿を消して再び我家に戻るとき、モクは必ず見知らぬ犬を連れてくる。それらは皆大きくて強そうな犬ばかり。荒々しさや猛々しさを全身に現し、互いに競いながらモクの動きに付いてくる。

ところが何故か、あの極端に臆病だった筈のモクは、そんな荒くれ共の中で威張っているような気がしてならない。それは不思議な光景だった。簡単には、到底理解出来ない姿でもあった。

私は一人前の男のつもりだが、荒くれた犬達に取り巻かれたモクに近付くことはもとより、声を掛けて我家に呼び戻す気力も、ある時期失った。そこには凶暴さが漂い、危険な匂も常に漂っているからだ。しかしモクは違う。

夕暮れ近く、モクは小走りに動き出す。その動きを追って見知らぬ犬達も動き出し、いがみ合い、喧嘩を始める者も出てくる。

そうした者を後に残し、モク達はどんどん先に進む。行き先はまったく分からない。川原に出掛けるのか、遠くの原っぱにいくのか。

ただ、そんな私にも分かることが一つはある。たとえ彼女の周りでどんな争いが始まろうと、モクが怪我をしたり死んでしまうことはない、ということだ。

眺めていると、その集団の中でモクは蝶のように、自由奔放な姿で舞っている。近付きすぎる相手に咬み付き、軽やかな足取りで先に進む。そこには怯えもなく、困った様子も窺えない。

女王陛下、あるいは不良少女。集団の中心に君臨するモクには二つの相反する表現が同時に当てはまる。

（あの仔犬が何故ここまで、・・・・？）

私にはそんな事態がよく飲み込めない。不可解な世界だけがそこにある。

十日か二週間後、気が付くとモクの姿が庭にある。疲れ切った、全身ドロにまみれた姿で、自分の小屋の前で眠っている。

「おい、どうした？」

私は普段の癖で声こそ掛けるが、相手の答えを待つ訳でもない。モクの過ごした最近の日々を思えば、そうなるのはごく当たり前の話。それに、聞かれた

相手にだって、今は答える気力もなくなっている。
ふと、モクから目を離して周囲を見る。すると確かに二、三匹の犬が残っていて、これも疲れ切った姿でこちらを見ている。
その様子に、悪戯心が湧いてくる。
「おい、そこの犬達。ここに来ないか。」
そういうと、一頭の厳つい大きな犬が起き上がり、ゆっくりとこちらにやってくる。
「お前もモクに翻弄された口か。それにしても、お前の身体は大きいな。一体、何キロあるんだ。三十キロか四十キロか、・・・・？」
勿論、それに答える言葉を相手はもたない。その替わり、初対面の筈だったその大犬が、私の差し出す両手に全身を預け、長くて大きな舌を出して私の顔を舐め回す。
不思議と言えばこれも不思議。飼犬に野良犬を含めて、犬の世界は私の理解もおよばない。しかし、その不可解さが今は嬉しい。実験科学を唯一信奉している先生達にこの心境を話したらどうなるか。それを考えるだけで、可笑しさが込み上げてくる。
やがて十一月、冬将軍の季節がやってくる。

怪物ジョン太　その二　強引な侵入者

札幌が冬の季節を迎える少し前、我家で一つの事件が起こった。
その日が何曜日だったか、記憶にない。また、そのとき自分が何をしていたのかも、記憶にない。ただ、その事件が起こった時刻が昼少し前だったという記憶はある。

我家にはそのときすでに、最初の子供が生れていた。妻はその子を胸に抱き、黙って外を見ている私にいった。

「貴方、ベランダの外側に何かがいて、ドンドン、ガリガリやってるの。窓ガラスが割れるかもしれないわ。」

そう言われてみれば、私の耳にもそんな音が聞こえている。

（一体、どうなっているのだ。誰か悪戯でもしているのか、・・・・・？）

そう思いながら、ベランダの方に顔を向ける。しかし、妻の背中が邪魔になり、外の様子が分からない。

取り合えず椅子から立ち上がり、妻に寄り添う形で外を見る。

ベランダの開き戸は内側と外側の二枚。手前が摺りガラスで、外側は透明なガラスが入っている。そんな二枚のガラスを通して、茶色の物体の姿がガラス戸の下半分にぼんやりと映り、何か意味不明の動きをしている。

「おや何だ、これは、・・・・・？」

誰にいうでもなく、私は呟き、妻の脇を抜けながら相手を確かめようと覗き込む。

犯人は薄い茶色の毛に覆われた大型の犬。その尻尾が何故か大きく振れている。悪意はなさそうだ。ただ、我家のベランダのガラスを気安く叩くような相手を私は知らない。

二つの簡単な鍵を開け、二枚のガラス戸も取り合えず開く。すると一気に、北国の寒風が室内に飛び込む。

「あら、あんたはあの時の犬じゃない、・・・・・・！」

直感的判断の素早い妻には、その瞬間に相手が誰か分かったようだ。その声に押されて、私も相手を見直す。

厳つくて、大型の体格。決して長くはない茶色の毛並。その上、少し長めの

尻尾を包む貧弱な毛。
思い出した。これはまさに、あの時の犬だ。モクが不良少女の時間から解放された直後、私の呼び掛けに応じて身体を摺り寄せてきた、素性不明のアイツ。そのアイツが、親しみと喜びを全身で現しながら、目の前にいる。
「おいおい、一体どうした。腹でも空いているなら、何かやろうか、・・・・・・?」
だが、相手の様子からすると、私の当ては間違いのようだ。
「じゃ、なんだ。怪我でもしていて、傷の手当でも頼もうというのかい、・・・・・?」
いや、それもまったくの見当外れ。この元気すぎるほど元気な姿に、そんな可能性など、考える方がどうかしている。
(それじゃ、一体全体、お前は何を、・・・・・)
とまで口に出掛かったとき、私の身体を押し退けて、相手の身体は家の中。その勢いの猛烈さ、その圧倒的な迫力。
「パパ、私この子を抱いているから怖い。どうかして頂戴、・・・・・・。」
そんな妻の叫びは、誰の目にも至極当然。
「よし分かった。すぐ出てもらおう。」
意を決して、私は喜び勇んで室内を駆け回る相手の首筋をどうにか捕まえる。
それから、
「我家の今の状態からして、お前を家に入れることはできない。頼むから出てくれ。」
と言って、ベランダの外に誘ってみる。が、それは更なる間違い。私の行為を一方的に誤解してしまった相手が、
「そうかい。俺とレスリングがしたいのかい。じゃ、やろうじゃないか。俺の力を見せてやろう。怪我はさせないから、・・・・・・。」
という態度を明らかに見せる。そこで私も即座に反論。

「ちょっと待ってくれ。それはお前の錯覚だ、・・・・・・!」

しかし、天性の楽天家なのか、相手には私の懇願も悲鳴も理解出来ない。

使い古した竹箒のような尻尾を振り振り、相手はまず私を押し倒し、次に馬乗りになって、はしゃぎ回る。

よく考えれば、そこには一滴の悪意も、また一滴の嫌味も見当たらなかった。それでも、ピータイルの床に肘や頭が当たる度に、普段なら経験することのない痛みが走る。その痛み故に、私の相手に対する善意や冷静さが、一気にどこかへ吹き飛んでしまう。

「馬鹿者、もう止めるんだ。早くここから出て行け、・・・・・・!」

痛みをたえて私は怒鳴り、そして叫ぶ。しかし、それすら相手に通じない。とすれば、残るのは最後の手段。

相手に倒されたまま右手を伸ばし、石炭ストーブの台を探ってみる。そうして、細い鉄の棒でできたデレッキを握ると、馬乗りになった相手の背中を叩き始める。

勿論、そんな姿勢では叩く力も限られる。しかし、継続は力なりという言葉がある。やがて、相手も怪訝な様子で遊びを止める。一歩か二歩、背中を見せてその位置を離れる。

(しめた、・・・・・・!)

そう思った次の瞬間、すぐ立ち上がった私は、相手の臀部に一撃を加える。そこには一切の手加減もなければ、本来が善人と思える相手を思いやる気持など、心の片隅にさえ残っていない。

だが、それでも相手は怯まない。私に対する態度にしても、最初の善意から一向に変わる気配が見られない。

そこに至って、私は完全な敗北を意識した。

（これには勝てない、・・・・・・！）

本気でそう考え、唯一の武器を棄てた。それから、開いたままのベランダの二枚戸を改めて閉じ直し、相手の反応を窺った。

ベランダの戸を閉めたのがよかったのか。それとも、武器を放棄してしまったのがよかったのか。すでに戦意を失くした私の前で、厳つい身体の大型犬も静かになった。

石炭ストーブの反対側に居場所を求め、そこに横になって眠り始める。そうしながらも、彼（？）の友好的な尻尾の動きは止まらない。

「ああ、恐ろしかった。これから一体どうなるのか、怖かったし、心配だったわ。でも、この決着からすると、もう私も大丈夫。この善良そうに思える犬が時々家に入りたいなら、入れてあげましょうよ。私はそれでいいわ。」

（それ本当かい。とんでもない馬鹿騒ぎに付き合わされてしまったよ。本当にこれでいいのかい、・・・・・・？）

小さな命を守る立場の母親がそういうなら、男として、また父親として今更口にする言葉もない。ただそれでも、いい歳をしてお化けのような野良犬と格闘して負けた立場の本人としては、どこかに割り切れない感情も残っている。

すっかり冷たくなった部屋。その片隅で、唯独りだけ気楽に眠り込む大型犬。

（主は誰だ。この家は誰のものだ、・・・・・・？）

そんな声が、耳の奥に木霊する。

冬将軍の到来はもう直ぐ。これから我家でどんな冬が始まるのか、今や主の私にも分からない日々がやってきそうだ。

怪物ジョン太　その三　突然の事故

昭和四一年の一月中旬、大学内の規定により、私は修士論文を事務局に提出した。その内容は決して褒められるべきものではなかったが、ともかく提出してしまうと、安心感と疲労感、あるいは虚脱感といったものが一気に押し寄せ、自宅に戻ると、倒れるように眠り込む日々が数日間に及んだ。

そこから回復したとき、私は一通の葉書を書いた。その相手は妻の母親。その人は私達夫婦の生活を陰ながら喜んで支えてくれた人だった。

葉書には修士論文が無事に提出できたことと、感謝の言葉を書き添えた。しかしそれが皮肉にも、義母に出した最初で最後の便りになったのだから、人間の一生など、決して分からないものだと、つくづく思う。

その葉書をポスト入れて一息、夕食に妻が普段とは遥かに違う手料理を並べ、論文提出のささやかな祝いごとをしてくれた。そこには妻の他、最初に生れた娘と愛犬のモクも加わり、賑やかで楽しい晩餐のひとときになった。

翌朝、私達はいつもより遅くまで寝ていた。私には心身共に重い倦怠感が残り、それは一人三役も四役も勤めていた妻の場合も同じだった。

ドンドン、誰かが玄関のドアーを叩いている。予期せぬ早朝の音に、妻が一晩添い寝をしていた幼い娘を私に手渡し、急いで玄関に出る。

「どなたでしょうか、・・・・・・?」

「郵便局です。電報をお持ちしました。」

「え、電報ですか?」

「はい、そうです。」

狭い家のこと故、玄関の会話はそのまま寝室の中へ飛び込んでくる。しかし、誰からの電報か、まったく見当も付かない。

「今、開けます。」
慌てるような妻の声と同時に、玄関の鍵と戸の開く音が聞こえる。
「有難う御座いました。」
「いえいえ、仕事ですから、・・・・・。」
二人の会話は短い。再び玄関の戸が閉まり、郵便局員の立ち去る足音が聞こえる。
「貴方、電報よ。私の母の勤める小学校からなの、・・・・・。」
そう言いながら、妻がまた寝室に戻る。
開封せずに、ガウン姿の妻から手渡された電報。それを寝たまま手にしたとき、嫌な予感が重い頭を駆け抜ける。
「一体何でしょう。学校から電報なんて、・・・・・?」
その思いは当然、妻も私も変わらない。否、ずっと母子家庭で育った妻のこと故、妻の不安の方が計り知れない。
昭和四十年や四一年当時、自宅の電話を備える家は少なかった。新婚生活を始めて間もない我家の場合、そんな電話はおろか、テレビも冷蔵庫もなかった。しかしそれが当時、日本では普通の話だった。
ただ、手紙や葉書でなく、電報が急に届いたということが、私達の不安を掻き立てた。
ハサミを使い、電報の一端を開く。それから一瞬息を止め、恐る恐る文面に目を向ける。
コウチョウセンセイ　コウタクデタオレタ
ビョウインヘハンソウチュウ　イソギコラレタシ
文面そのものは簡潔にして明快。だが、その文面の先に浮かぶ筈の現実の姿

や情景が、私達にピンと来ない。
「これ、どういうこと？」
妻が泣き出しそうな顔で私に聞く。
「事故、それとも事件、・・・・・？」
その声が一段と高まる。しかし、同じ条件で電文を見ている私にしても、妻の疑問に答える術などどこにもない。黙ったまま、虚ろに一枚の電報を眺める。
時は一月の末。しかもここは、北国の北海道。深くて冷たい雪が大地を覆い、我家と六十キロほど南東に離れた街に一人で暮す義母の間に、大きな壁が立ち塞がる。
「ともかく、私達三人分の衣類をまとめて、札幌駅に急ごう。ぐずぐずしてる暇はないよ。早くしなさい。」
そう口先で言いながら、心の中は混乱の嵐が吹き捲る。
（突然の心臓発作や脳溢血が原因だろうか。それとも、独り暮しの義母が何か事件にでも遭遇したのか、・・・・・？）
電文は確かに、明快な事実を伝えている。しかし、そこにはこちらの求めるより具体的な事実が含まれていない。内容が内容だから、情報の不足は疑惑や不安の増大に拍車を掛ける。
荷物をまとめながら、妻は涙を流し、すでに嗚咽の声さえ抑え切れない。普段なら、しっかりしろよと言いたいところだが、それは言えない。少なくとも、彼女の唯一の親だった母親が現地で倒れ、病院に搬送されたという事実のもつ深刻さだけは、今更打ち消しようのない現実なのだ。
義母が運ばれたという病院のある街はかって、中学から高校時代の一時期に、父母と私が暮したことのある地方都市。そして今泣き止まない妻も、高校時代の三年間、その街で下宿しながら学校に通った所でもある。

これは唯一の救い。その街にさえ行けば親戚もあるし、二人共通の親しい友達もないではない。

自宅から札幌駅。そこで一番早く乗れる汽車を探し、少し大きくなりすぎた手荷物を抱えて目的地を目指す。

札幌駅からその街の駅までなら、距離にして六十キロ。乗車時間なら、一時間半というところか。その間、涙を流しつづける妻は繰り返し焦点のない言葉を口に出す。

（みっともないから止めなさい。）

狭い列車の中にはほぼ一杯の乗客がいる。私達三人の前にも横にも後ろにも。だから、そんな妻の様子は誰の目にも不可解さや、不信感すら抱かせる。だが、今だけはやはり、それが言えない。

自宅を出て約四時間、列車から降りた私達は、事前に通知らされた病院の玄関に到着。そこで義母の下で働く教頭先生に会い、手短に事態の流れと情況について話を聞く。ただ、そこに搬送されてきた義母がまだ手術室の中だと最後に聞いて、事態の深刻さに心が痛む。

それから一週間後、施術室から戻ったまま昏々と眠りつづけた義母に、わずか一瞬の間だけはっきりと意識が戻った。

私達はその時、義母のベッド脇に居て、妻の方はまだ一歳にもならない娘を抱いていた。

「母さん、私が誰か分かる、・・・・・・?」

妻が自分の顔を寄せながら、母親に尋ねた。すると、母親は自分のたった一人の娘をじっと眺め、それからおもむろに首を振った。

「じゃ、母さん。この子は誰、名前覚えている、・・・・・・?」

すると突然、義母の手が伸びて、幼子の頭にゆっくりとその手を置いた。

「ハルコ、・・・・・・・・・・・・!」

その言葉と同時に、義母の顔には心から染み出るような微笑みが浮かんだ。

「母さん、意識が少し戻ったのね。でも、自分の孫は分かっても、一人娘の私は分からないの、・・・・・・・?」

脇で聞いていると、そんな妻の呼び掛けは切なかった。しかし、自分の娘の一言が聞こえていたのかどうか、義母はすぐ重い瞼を閉じ、再びその目を開くことがなかった。

その病院の中で義母は二週間、昏睡状態で眠りつづけ、脳出血を止めるという手術の最中、帰らぬ人となった。

怪物ジョン太　その四　救世主の出現

時期は二月の中旬。通夜に葬式、それからすべての後始末が私達若い夫婦を待ち受けた。勿論、学歴のないまま、北海道で最初の女性校長を勤めた義母の人徳から、私達はその間、多くの好意的な人々に支えられたのも事実であった。

自宅を飛び出して一ヵ月半、逞しくも寂しく生きた義母の後始末も済み、そろそろ夫婦で家に戻る話のできる時期がやってきた。

「今年の札幌は大雪だったそうだけど、我家は大丈夫かな?」

私がまず、自分の家のことを気遣った時、妻の方はまったく別のことを考えていたようだ。

「それはそうと、あのか弱いモク、大丈夫生きているのかな。あの子にこの寒さの中で自活できる可能性はないように思えるけど、・・・・・・?」

確かに、そう言われてみればその通り。我家に拾われたとき以来、モクは私達にすっかり守られ、三食昼寝付きの最も安易な生活しかしていない。

（過ぎ去った極寒の一ヵ月半。モクがあの自宅の周りで立派に生き抜く可能性などあっただろうか、・・・・・・？）

そう胸の内で考えてはみるが、こんなに遠く離れていては心配だけが先にたつ。

「おい、こうしては居られない。早く戻って、今度はモクを探し出さなくちゃならないぞ、・・・・。」

「本当にそうだわ。まだし残している後片付けの仕事はここの皆さんに頼んで、明日にも札幌に戻りましょうよ。」

我家の愛犬モクの話になると、私達夫婦の合意も一瞬の内に成立する。

その言葉通り、翌日早々、私達は手近な下着類をまとめ、ローカルバスと列車を乗り継いで札幌に戻る。時刻はすでに夕方、日中の明るさなどもう期待は出来ない。

駅からは普段乗り慣れないタクシーを拾う。そのタクシーの中でも、妻の心配は刻々と膨れ上がる。それは私の姿でもある。ただ、それをそのまま口に出すか出さないか。その一点でだけ、私達夫婦の姿勢がはっきり別れる。

やがて一五分、タクシーが表通りに止まり、娘を抱いた妻を後に残して、我家の玄関に駆け戻る。しかしそこに、期待したモクの姿は見当たらない。

私は後ろを振り向き、大きな声で叫んでしまう。

「モクがいないんだ、・・・・・・！」

その声を聞いて、小さな娘を抱いた妻も雪道を走り出す。

「本当、もう少し辺りを探してよ。」

「分かった。じゃ、玄関の鍵を開けて中に入っていて、・・・・・・。」

私はモクの姿のない玄関に手荷物を下ろし、高く降り積もった雪の山を越えながら、モクに呼び掛ける。

「モク、今帰ったぞ。近くいるなら、急いで戻って来いよ。」
しかし、モクはなかなか出て来ない。とその時、私は離れたばかりの玄関先に、丸い氷の皿が二枚あったのを思い出す。
「ジョン太、お前はどうした。お前なら死ぬ訳もないよな、・・・・・。」
ジョン太とは、私達夫婦がここを離れる前、あの怪物の大型犬に付けて置いた名前。しかも、その相手のジョン太本人が、とても喜んだ呼び名でもある。
近付く暗闇、屋根の高さまで降り積もる雪の山。顔の肌に染みる冷気。
私の声が相手に聞こえたのかどうか。それを考えながら、辺りの様子を窺う。
一分、二分、三分。犬の声は聞こえて来ない。
(やはり駄目か、・・・・・?)
そう思い始めた直後、目の前の暗闇から一匹の大型犬が姿を現す。しかも、その尾が元気よく左右に振られ、ジョン太特有の姿がそこにある。
「おい、ジョン太。元気だったか!」
私は思わず嬉しくなって声を掛ける。
(当たり前じゃないか、一体誰に、何を言っているんだよ。)
それは声無き声で答えるジョン太からの返事。それにしても、こいつはつくづく偉いヤツだと思わずにいられない。
「とこでジョン太、モクはどうした。お前と一緒ではなかったのか、・・・・・?」
私はそんな相手の逞しさに釣られて、本音の質問を投げ掛ける。すると、私の言葉を理解したのかどうか。ジョン太は再び背後の暗闇に向って駆け出していく。
私の両肩にあった硬い緊張感が、その時ふっと抜けたような気がする。それは何故か、その理由や原因は何か、と聞かれても答えられない。
数分後、再びジョン太の姿が暗闇の先から現れる。それからすぐ、モクの姿

もジョン太の背後に現れる。
「モク、お前も生きていたのか、・・・・・・!」
予め予期していた如く、私の声は元気で、淀みがない。すべてがそうなると信じていたかの如く、私は声を張り上げながらモクに近付く。しかし、愛犬モクの様子がどうもおかしい。
まず、顔付きが三角に尖っていて、両目に怯えの影が浮かんでいる。それをすぐ裏付けるように、近寄る私を見て、モクは半腰で逃げかかる。
「モク、どうした。私を忘れてしまったのか、・・・・・・?」
どうやら、それは間違いない事実。あと数歩を残して、モクは私の前から一旦姿を消してしまう。
その反面、怪物ジョン太は余裕しゃくしゃく。左右に尾を振る態度も、無邪気そうに飛び付いてくる様子も、かってのジョン太と変わらない。
ともかく、そこまでの事実と現状を把握して、私は我家の玄関にもう一度戻る。それから、手短に実情を伝え、モクのことはもう大丈夫だと教えてやる。
数日後、近所の人や時折見回りに来てくれたという妻の学校の友人から、話を聞いた。
「実はね、お宅のモクちゃんをずっと支えつづけたのはあの厳つい大型の犬なの。寝るときはいつも玄関先で一緒。あの大型犬は新聞配達も郵便配達の人もお宅の玄関に近付けないのよ。下手をすれば私だって唸られるし、本当に怖い犬だったわ。」
「でもね、あの犬はモクにだけ優しくて、モクはお宅の玄関を離れて歩くときも、いつもあの犬に寄り添っていたわ。多分、こうして今まで生きていられたのだから、食事もあの犬がお宅のモクのために分けてやったに違いないわよ。考えてみると、これは私達人間だって、なかなか出来ない話だと思うの。

そうじゃない、・・・・・・?」

そう他人から言われる通り、過去一ヵ月半の日々を考えると、ジョン太なくしてモクの命もなかった、ということは誰が考えても明らか。

私は素直にその考えを受け入れる。それは妻もまた変わらない。

(ジョン太はモクと私達の救世主。)

後日、その言葉を私達夫婦は繰り返し語り合い、咬み締め合った。

「ジョン太、本当に有難う。」

モク本来の生き生きした姿を見るにつけ、その後私達は何度となく、怪物君に感謝したものだった。

怪物ジョン太の逸話　その一　牛乳瓶泥棒

夫々の内面に隠された悩みと苦しみの問題はともかく、私達夫婦は間もなく普段の日常生活に戻った。

ある朝、新聞の朝刊を玄関先まで取りに出掛けたとき、私は見た。ジョン太の寝跡にできた氷の丸いお皿と、その脇に転がるガラスの牛乳瓶。確かそのタイプの牛乳瓶には一合の牛乳が入っていて、毎朝早く、リヤカーやソリを引いた専門の配達員が各家庭に配っているものだった。

しかし、その不思議な組み合わせを最初に見たとき、私は深くも考えず、そこで頭に浮かんだ筈の不可解ささえ、何故かすぐ忘れてしまった。

数日後、久し振りに大学に行こうとして我家の玄関を出ると、すぐ右脇を歩き去るジョン太の後姿に出会った。

「ようジョン太、これからどこに行く?」

私は陽気に声を掛けた。すると相手もこちらをちょっと振り返り、ジョン太

のシンボルともいえる長くて細くて奇妙な尻尾を振り、軽い挨拶で応えてくる。ただ、そうしながら喜んですぐこちらに戻るかと思っていると、ジョン太はそのまま先に進んでいく。

（今朝のジョン太はおかしいぞ、・・・・・？）

私はそれを見てふと考え、興味津々の気分を抱えながら、ジョン太の後を追うことにした。

ジョン太は踏み締められた雪道をゆっくりのんびりと歩く。そこは脇道だから道幅も狭く、人通りも余りない。

ジョン太の先に目を移す。すると、ジョン太より先にソリを引いた牛乳屋さんがいて、ガラス瓶に入った牛乳を一軒、一軒配っている。

それは朝早く住宅街で見受けられるのどかな風景。昭和四十年代まであった風物詩の一つでもある。

牛乳屋さんの動きは淀みない。各家庭の玄関に備えられた特性の箱に牛乳を入れると、再びソリに戻って新たな牛乳瓶を一、二本取り出す。それからまた次の家に近付き、同じことを繰り返す。

そんな牛乳屋さんとその後につづくジョン太の間隔は四、五メートル。何故か彼は、牛乳屋さんのゆっくりした動きに合わせるだけで、牛乳屋さんを追い越し、さらにその先には進もうとしないのだ。

（ジョン太は今、なんのためにこうしているのか？）

ふと、疑問が起こる。

ジョン太の様子からすると、彼が牛乳屋さんを威嚇したり、襲ったりする可能性は考えられない。また同時に、ジョン太が牛乳屋さんと遊ぶ機会を待っているとも思えない。

ジョン太はいつも、ゆったりと歩く。それが彼の習慣であり、彼の個性でも

あると私は思う。しかしそれにしても、黙々と牛乳配達をつづける人の進み方と、普段いつも見せるジョン太流の歩き方なら、その差は歴然としている。今ここで、あっという間に追い抜いていく方が自然の成行きに違いない。

私とジョン太と牛乳屋さんの位置関係は変わらない。道路がすぐ先で左に折れても、それは同じ。だとしたら、もうこれ以上、彼の後を黙って付いていくことに意味はない。また脇から見れば、そんな私の姿こそ、外の人から妖しいと疑われることも考えられる。

そのことに気付くと、私の足も自然に止まる。ところがその時、異変が起こった。

ある一軒の玄関先に、見慣れた牛乳受けの箱が置かれている。その箱に向って牛乳屋さんが無造作に近寄り、両手にもつた二本の牛乳瓶を差し入れる。

常に先を急ぐ牛乳屋さんは自分の背中で起こることなど考えない。だから振り向くこともなく、気にすることもまったくない。ただ、それを承知なのかどうか、今まで道路の上を黙って歩いていたジョン太の態度がそのとき、急に変わったのだ。

彼は牛乳屋さんが立ち去ったばかりの場所に、ゆっくりと歩み寄る。それから頭を地面に近付け、牛乳が入ったばかりの箱の蓋を、口を使っておもむろに開く。

その際、外の犬より遥かに大きい筈だが、ジョン太の口の動きは驚くほど器用にして巧妙。小さな箱の蓋こそ開いたままになるが、その箱にはまったく傷など残らないようだ。

次に、ジョン太は一本の牛乳瓶を口に咥え、今度は後ろを振り向いてこちらに近付く。だが、彼は待ち受ける私の存在を無視して、すぐ脇を通りすぎる。

ジョン太はゆっくり先に進む。その姿を後ろから眺めていると、ある不安が

頭に浮かぶ。

（ジョン太のヤツ、きっと我家の玄関先であの牛乳を飲む、・・・・！）

私の嫌な予感は外れなかった。思った通り、彼はまず我家の玄関先に座り込む。それから両手でガラスの牛乳瓶をしっかり押さえ、再び口と犬歯を使い、厚紙で出きた丸い蓋をこじ開ける。

その間、ジョン太の動きに淀みは見えない。というより、彼のすべての動きはそんなとき、芸術品ほどの風格がある。

我家の玄関先から数メートル離れた雪道の上に、私は立ちつづける。それを完全に無視するような形で、ジョン太は牛乳を飲み、大きな舌を伸ばしてこぼれた口の周囲の牛乳の始末に取り掛かる。

やがて、ジョン太の動きも一旦止まり、また立ち上がると、牛乳屋さんの歩き去った方角にまた歩いて行く。

私はこの話を、女子大から戻った妻にもその夜話した。そして、無邪気に二人揃って笑い転げた。

それから一ヵ月後、路上の雪が溶けた。気温も上がり、北海道の春がやってきた。ようやく卒業の年を迎えて、妻の大学通いもつづく。

そんなある朝のことだった。いつも通り、妻は片手に重い鞄を抱え、家からバス停への道を急いだ。

やがて、バス停が目の前に近付き、朝のラッシュが妻を包んだ。ところが、その日に限って、周囲を歩く人々の様子がどうもおかしい。普段聞くことのない声が響き、誰かが妻を指差してもいるような気もする。

妻はその気配に驚き、ふと立ち止まって周囲を見回す。すると、例の牛乳瓶を口にくわえたジョン太がすぐ後ろに居て、その上、あの長い尻尾を振りながら朝一番の挨拶をしている。

一瞬、妻は困惑の極に達した。

（この場をどう切り抜けるか。時間もないし、どうしよう、・・・・・？）

妻はとっさの判断に迷った。しかし、最善の抜け道など、どうしても思い付かない。仕方なく、その場に腰を下ろして、ジョン太と朝の挨拶を交わす。それから恐る恐る自分の手を伸ばし、ジョン太の口から問題の牛乳瓶を取り上げる。次に、その牛乳瓶を自分の鞄に入れ、知らん顔でバス停に立つ。

やがて、南の方角から市バスもくる。先を急ぐ周囲の人々が次々とそのバスに乗り込み、妻もその後に付いてバスの入口の手摺りにつかまる。

「お早う御座います。」

運転手に向って、妻がいつも通りの挨拶をする。するといつもは無言で応える相手から、思わぬ言葉が返ってくる。

「お客さん、それ貴女の犬ですか。困りますよ、そんな大きな犬をこのバスに乗せるなんて、・・・・・。」

妻はすでに、自分の後ろにジョン太が待機していることすら忘れている。だから、運転手の言葉が自分に向けられたとは、その瞬間分からない。

それでも、それが他人の話だと思いつつ、足元から後ろを振り返る。とそのとき、妻の脇をすり抜けて、何者かが満員バスに乗り込んでしまった。

それにはバスの運転手も、乗客も驚いたに違いない。しかし、弁明の機会すら奪われた妻にとって、事態は最悪のシナリオを辿っている。

「ごめんなさい、すぐ降ろしますから。ジョン太、貴方は降りなければ駄目よ。」

妻はいった。ところが、自分の掛けた言葉に自信のない妻をよそに、問題のジョン太の方は、とても素直にバスを降りる。

「ジョン太、夕方まで待ってね。」

それは妻の残した最後の言葉。バスは何事もなかったようにバス停を離れ、

札幌駅に向う。

その日の夜、私は妻から朝の顛末を聞いた。その上、帰宅した妻が自宅の玄関で待ち受けるジョン太に、その牛乳の瓶を約束通り返したという話も聞いた。

私は声を出して笑った。それを横目で睨みながら、妻もまた楽しそうに笑っていた。しかし、その顛末に含まれる深い意味を、私達若い夫婦はそのとき気付けなかった。

怪物ジョン太の逸話　その二　名誉ある怪我

季節が変わっても、ジョン太の様子は変わらなかった。午前中、我家のベランダのガラス戸を自分の前足でまず叩き、すべてが当然である如く、泥足のまま室内に入り込む。

それから、自分で勝手に決めた寝場所まで歩き、そのまま身体を丸めて眠り込む。それをこの家の主は拒むことも、止めることも出来ない。

夕方早く、そのジョン太が目を覚ます。それから背伸びをして、おもむろに立ち上がる。

次に、ジョン太はベランダのガラス戸の前に行って、立ち止まる。それは彼一流の意志表示。

（早くこの戸を開け、外に出せ。）

と言っている。

勿論、それも私は逆らえない。何度か、

「モクと同じ餌をやるから、夜の外出を控えてくれないか。」

とも頼んでみたが、彼からまともな返事は返って来ない。

それほど絶対的権力と力をもつたジョン太だったが、時折、彼のお尻の辺り

に大きな傷も浮かんで見える。そこである日、私は夕方になってまた外出するジョン太の後を追ってみた。

我家の裏庭に出ると、ジョン太はまず、空に向けて鼻先を伸ばす。それから周囲を見回し、ゆっくりと歩き出す。その姿はいつも見ても、威風堂々として勇ましい。

ジョン太は我家の庭先を離れると、川原のある方角に向う。その途中、彼は幾頭かの犬に出会い、相手の挨拶を軽々と受け流す。決して脅かしたり、威嚇する雰囲気など、そこにない。

ただ時折、相手が怯えているのか、遠くでジョン太に唸り掛ける犬も出てくる。しかし、ジョン太はそれに一瞥を送るだけで、決して攻撃は仕掛けない。

ところが、例外はどこにでもあるもので、そんな犬の中にはなかなか唸ることを止めない者もやはり出て来る。

そうすると、ジョン太はいつもの態度を脱ぎ捨てる。彼は突然、そんな相手にギャロップで近付き、自分も唸りながら飛び掛る。

その際、怪物ジョン太は相手を咬まない。重い体重と大きな両前足だけ上手く使いこなし、相手の犬を上から押し潰すのだ。それなら、悲惨な結果も生れず、後に遺恨を残すことも少ないに違いない。

ジョン太もそうした自分のやり方に、普段から自信をもつているらしい。彼は自分の身体の下になった相手に戦意がなくなると、すぐその場を離れる。その時、彼は自分の背後を振り返らない。

（すべてはこれで済んだ、・・・・・。）

少なくとも本人はそう思っているのだろう。

ただ、そこにもまた、例外の一つや二つ転がっているようだ。たとえば私が現場の一つを目撃した時、目の前に一頭の小柄な犬が地面に転がり、私達人間

なら誰でも分かるような無条件降伏の態度を見せていた。ところが、ジョン太がいつものようにゆっくり歩き去ろうとした時、その貧相な犬の態度が一変したのだ。

そいつは急に立ち上がった。そして自分の二倍か三倍もありそうなジョン太の尻に咬み付き、あっという間に逃げ去ろうとする。

私は驚いた。驚きながら、次に起こるであろう悲劇に、冷や汗を浮かべた。しかし、私の思惑はすっかり外れた。

後ろから尻に咬み付かれたジョン太。その当人は何故か、卑怯な相手の犬に見向きもせず、ただ淡々とその場から歩き去ってしまった。

その当日も、またその後になってからも、私はジョン太の不可解な態度について考えた。そこにどんな思惑があり、どんな意味が隠されているいか。私は考えずにいられなかった。しかし、ジョン太は何も語らず、何も教えてくれない。

怪物ジョン太の最後　裏切り

ジョン太は元々陽気な犬の典型だった。何かで落ち込むことも、また何かに困ったり、苦しんでいる様子も決して見せない犬だった。

その反面、ジョン太はとても頑固で、私を含めた人間の中に、主らしきものを持とうとしなかった。

彼は初めから自由を愛した。完全な自立と自活をモットーに、逞しく生きる犬でもあった。

札幌市内の雰囲気が春から夏の装いに変わるころ、ジョン太は益々陽気な犬の性格を顕にした。彼一流のお遊びが大好きで、その範囲も日に日に広がる兆

しが見えていた。

たとえば、中身の入った牛乳瓶の回収。この回収癖は間もなく牛乳配達員の一人に現場を発見され、彼本人が配達する人と配達を受け取る人々の双方から激しく怒られる事態に陥った。それはまた、彼の飼主と誤解された私への非難と叱責にも繋がり、その誤解を解く方策について考えても、到底答えの出る話ではなかった。

ジョン太はまた、近所の子供達が公園でする野球やキャッチボールにも特別な興味を抱き、チャンスがあれば何時でもその中に飛び込み、子供達の悲鳴や叱責の声すら楽しむ悪い癖を持つようになった。

しかし、我家の周囲に住む人々から最悪の問題は他にある。

多くの犬は身近な人間との間で喜びを現すとき、何度も人間に飛び付いて自分の感激と感動を表現する。それはごく自然な犬の姿であると同時に、それを受け止める側の人間にとっても、心の和む時間と瞬間に違いない。

ただ、すべての物事には程度とか限度というものがある。それが適切な範囲を逸脱したとき、好意は嫌味に、善意が悪意に、そして喜びは怒りとなって撥ね返る。

昭和四十年代の当時、夜も遅くなると、遠くから酔った人々の歌声や罵声が聞こえる。その一部はやがて我家の近所に近付き、音量を増して辺りを騒がす。

そんなとき、どこからかジョン太が現れる。それから彼は泥酔に近い相手を見付けては飛び掛る。

本人のジョン太にとって、その行為には悪意の欠片も含まれない。しかし、彼の飛び付く行為の結果が余りにも悪すぎる。

足元の定まらない酔った男にとって、突然飛び掛る三十数キロの巨体は支え切れない。その結果、すでにふらふら状態に陥っている人の多くは瞬時に倒さ

れるか、少し間を置いて倒されるかのどちらかとなる。
さらに最悪なのは、ジョン太の場合、倒れた相手の上に被さり、その人物の帽子や手袋まで奪い取って遊ぶこと。それには当然、食い破られ破壊されて原型すら失った残骸が、翌朝早々、辺り一面のゴミとなって広がってしまうというおまけが付く。
そんなある日、我家の郵便受けに一通の封書が入っていた。何気なく私はそれを居間に運び、ハサミで切って中身を調べた。すると、そこには地区郵便局からの通知、もしくは通達として、次のような内容の書面が書かれていた。

お宅に飼われている大型の犬が非常に危険で、配達員がお宅に行くのを怖がっています。したがって本日以降、配達員の立場を考慮し、お宅へ配る郵便物の配達を中止します。
尚、この件についてご意見が御座いましたら、左記の郵便局までお越し下さい。

昭和〇〇年〇月〇〇日
〇〇郵便局長

この通知を受け取るまで、私も妻も、ジョン太の巻き起こす様々な事件や事故の後始末に追われてきた。勿論、その中には簡単に誤解や偏見を解き、皆で笑い飛ばせる話も少なくなかった。ただ、この通知に限ってこちらには弁明の余地がまったくなく、たとえ弁明に努めたとしても、それで相手側の理解を得られる筋合いのものではなかった。
そんなとき、妻から私に声が掛かった。
「パパ、どうするの。貴方だって、大学から重要な書類が郵便物で送られて

くるでしょ。私にも、田舎の友人や知人から大事な手紙がくるわ。でもね、あのジョン太がジョン太だから、・・・・。」

確かに、それはそうだと私も思う。だから悩み、だから苦しみ、だからすぐには返事も出来ない。

我家にとって、ジョン太は終始、飼犬ではなかった。もっと的確にいうなら、我家とその周囲の主は彼であっても、私であるとは決して言えない。

彼は間違いなく、ここら一帯をテリトリーにしてきた。テリトリーだから、彼は守り、テリトリーだから彼はいつも自由に振舞った。だからここで郵便局から脅迫的なことを通知されても、適当な打開策など私の手にある筈もなかった。

私は一先ず考えた。そして、苦しむこともした。かってモクの件では、ジョン太に大きな借りもあった。だから、すべての条件を考え合わせると、次善の策も有り得ないように思えた。

最後の決断のときを迎え、私は妻に告げた。

「ジョン太を保健所に送ろう。」

ところが、相手の妻からはわずか一言さえ、返ってくることがなかった。

数日後、札幌市の野犬収容所から職員を乗せた車が一台やってきた。私はその車に手を上げ、数人の職員を出迎えた。

「さて早々ですが、問題の犬は何処に居ます？」

「あそこに居るのがそうです。」

そこまで、相手と私のやりとりは事務的だった。感情を殺した会話がそこにあった。しかし、私の指差す方向に目を向けたとき、市の担当職員の表情が一変し、思わず叫んでいた。

「これは我々の手に負えません。」

確かに、その判断に間違いはなかった。そこで仕方なく、ここは私の出番だ、と腹を決めた。

モクの散歩綱を片手に、私は膝を折った。それから、少し離れた場所で遊びに興ずる相手に呼び掛けた。

「ジョン太、こっちに来てくれないか。」

その声に応えて、ジョン太が声のした方向に振り向き、いかにも嬉しそうな様子を見せながら、私の前に走ってきた。

私は彼の摺り切れ掛かった首輪に綱を付けた。それからおもむろに立ち上がり、野犬収集車へと、ジョン太を誘った。

その間、ジョン太は例によって私に絡まり、甘えたままの姿で、あの長くてとても不思議な自分の尾を振りつづけた。

やがて、市役所の車が現場を離れ、立ち尽くす私だけがその場に残った。

呆然という言葉がある。それは自分で考える力を完全に失い、黙ったまま立ち尽くす人間の心理状態を表す。そこにはまったく、他の意味は含まれない。

裏切り者、と叫ぶ誰かの声が聞こえる。偽善者、とまた別の声も聞こえる。

四十年という長い時間を隔て、それらの言葉は決して忘れることのない記憶と共に、今でも老い始めた私の耳に響いてくる。

愛犬モク　その一　子守役の報酬

女子大四年の最後の年、妻の前途に新たな難題が浮上した。それは卒業論文の製作。

女子大に入学したときから、妻は日本文学を専攻し、卒業論文のテーマも芥川龍之介の和歌という題を本人自身が選んでいた。

芥川の有名な短編小説については、私もある程度読んでいた。しかし、芥川が残したという和歌についてなら、存在することすら知らなかった。

春から夏、そして秋の初めまで、妻の論文製作も順調に見えた。その間、二歳に近付いた一人娘を近所の叔母さんに預け、妻は毎日いそいそと大学に通った。

ところが、北海道が初冬の寒さを迎えるころから、妻の顔色が冴えない。聞いてみると、卒論が上手く書けないのだ、という。

「誰にとっても、卒論は人生の最初で最後のものだから、難しいのは当たり前さ。まあ、頑張って、・・・・。」

少しは相手の身になって、私はそんな妻に同情と励ましの言葉を掛けてみた。しかし、それがそもそも間違いだった。

「貴方、貴方は国立大学の文学部にいて、しかも博士課程まで進んだ学者の卵でしょ。だったら、普段から食事と洗濯に加え、小さな娘の世話から犬の世話で時間的にも余裕のない私の卒業論文だって、手伝ってくれてもいいじゃないの。」

よきに付け、悪きに付け、女性の妻はすべて自分の鋭い感性で物事を考え、感覚的に判断したり行動する人間だった。だから多くの場合、夫婦間の議論の場において、妻の意見はごく簡単に打ち負かされる運命にあった。ただ、この話はどうも違った。

当時、我家の情況でいうなら、時間がないという妻の言葉は正しかった。また、その時点で置かれていた私の立場からしても、妻の期待や要求は正当に思えた。しかし卒論は本来、学生個々人の努力や能力が試されるものであって、

周囲から手を差し伸べるものではない、という考えが私にはあった。
だから、妻の卒論の中身に手を入れることは最初からしなかった。ただ、彼女の主張する論文製作時間の少なさについては、私にも当然責任があった。にもかかわらず、私は見て見ぬ振りを続ける悪い夫だったと自分で思う。
ある日、妻は具体的な要求を口にした。
「あのね、他のことは我慢するけれど、夜の論文製作時間だけはある程度欲しいの。でも今は、娘の添い寝があるでしょ。あれに毎日、一時間から二時間取られてしまうと、もう私は書けないの。なんとかならないかなあ、・・・・・。」
溜息の漏れるそんな妻の言葉に、私は困った。
(それでは私が添い寝役を引き受けよう。)
と言えば済む話だったが、私も家に帰って毎晩専門書を読む習慣を続けていたから、そう簡単に返事の出来る問題ではない。
一日二日と、私は思案に思案を重ねた。ここをどう切り抜けるか、どう打開して夫婦の両立を図るか。それが問題だった。そこに、核家族生活の難しさがあった。
毎日夕食が済むと、私は専門書を読み始める。内容の多くは英文だから、集中力に加えて辞書もいる。時間が進むと、その背中に妻の涙を浮かべた目線が突き刺ささる。私も落ち着いて自分に集中出来ない。本から目を離し、何気なく辺りを見回す。
足元にモクの姿がある。夜はいつも家の中で暮すモク。頭も身体も人一倍活発な彼女の場合、騒ぐことも遊ぶことも禁止されるその時間が、退屈でたまらない。
そう思いながらモクを眺めていると、私の頭にあるアイデアが浮かぶ。
(よし、これは試してみる価値がありそうだ、・・・・・!)

私はまず、椅子を降りる。それから、床の上でごろ寝を続けるモクに呼び掛ける。

「おい、モク。利口なお前に頼みがあるんだ。ママが困っているから、娘の夜の添い寝は毎晩お前の仕事にしてくれないか？」

すると、床に座り直したモクが、私の掛けた言葉に戸惑い、首を傾げてこちらを見ている。

それはそうだろう。モクはまだ、自分の子供を産んだことはおろか、誰かに何かしてやる、という立場にさえ、それまで立たされたことがなかった。

しかし、私は諦めない。諦め切れない、といった方がこの際、適切な表現だったかもしれない。

そこでまず、娘を抱いた妻に、そのまま隣室のベットに入りなさいといった。それから改めて、目の前のモクを抱き上げ、真剣に話し掛けた。

「あのな、モク。お前がもし娘を毎晩寝かし付けてくれたら、私達はとても助かる。だから、お前が添い寝に成功して娘が寝てくれたら、私達はお前に心から感謝する。その上、お前の大好きなタラの干物を褒美にやろう。」

その言葉の内容は多分、モクにとって不愉快な話に違いない。それに、表現の上こそ私からモクへの依頼という形を取っているが、その実態はまったくの押し付けに他ならない。

ともかく、私はモクの身体を抱き上げる。それからベッドのある隣室に入り、添い寝を始めた妻に向って、小さく声を掛ける。

「そこにモクを入れるから、居間に戻って、・・・・・・。」

「えっ、本当にそんなことが出来るの？」

「まあいいから、すぐ出なさい。」

私はモクを娘の脇の布団の中に押し込む。それからモクを睨み付け、ダメ押

しの言葉をさらに加える。
「モク、娘が眠り込むまで、そこから出たら許さんぞ。いいか、分かったな。」
その声をモクはモクなりに聞き、居間に戻った妻も半信半疑で聞いている。
自分を取り巻く情況の変化を、幼い菜愛娘が最初は奇妙な顔で見ている。でもやがて、幼い娘の手がモクの顔や頭に伸びて、新たな情況の変化を本人が好意的に受け止めた事実が鮮明になる。
私はそこで、寝室を離れる。その途端、妻の低く抑えた声と顔が私の動きを止めてします。
「パパ、後ろ。モクが一緒に出て来てるわよ。」
私は振り返る。そして妻の言葉が現実に起こっていることを否応なく確認させられる。仕方なく、もう一度最初に戻って、ことを始める。
「モク、駄目だ。お前は添い寝が終わるまでベッドに居なければいけないんだ。さっきもいっただろう。頼むからそうしてくれよ、・・・・・。」
その言葉に合わせて、私は再び小柄なモクを抱き上げ、娘の脇に放り込む。それと同時に、今度は居間と寝室を隔てるカラ紙を全部締め切り、モクの逃走を阻もうとする。
間もなく、隣室から娘の嬉しそうな声が聞こえる。
「モッコ、モッコ。」
それはまだ、口のよく回らない幼い娘が、大好きな犬に呼び掛ける声。嬉しそうで、楽しそうで、普段聞くことのない娘の甘え切った言葉だ。
(これでどうやら、難題も片付くか。やれやれ、・・・・・!)
それは不安と期待の入り混じった言葉に出さない私の心境。
我家の夜の時間がようやく、静かに流れ始める。その間、妻も私も居間の椅子に座ったまま、事態の推移に耳を傾ける。

一時間後、隣室から何かゴソゴソするような音が聞こえる。次に、寝室と居間の間にある出入り口のカラ紙から、ガリガリと遠慮のない物音が聞こえる。

妻が半信半疑の顔でこちらを見ている。私はすぐ立ち上がり、そっと物音のしたカラ紙を開き、事態の真相を確かめる。

ベッドの中には、しっかり寝むり込んだ姿の娘がいる。そして目の前には元気溌剌、どこか自慢気にも見えるモクが居て、偉そうな態度でこちらを見上げている。

愛着の情を表すモクの尻尾の動きはいつも通り。しかしそこには、かって見せたことのない横柄な態度もあって、こちらを見上げながら何かを要求しているような気がする。

「モク、ご苦労さん。」

それは私の第一声。

「モク、本当に有難う。貴方は利口なだけの犬じゃないのね。」

それは妻の口から出た感謝の言葉。その言葉だけで、モクが満足したかどうか分からない。

「おい、僕がさっきモクに約束した褒美はどうした、・・・・・?」

「あら、すっかり忘れていたわ。すぐ持ってくるから、モク待っててね。」

その妻が台所から居間に戻り、タラの干物の一片をモクに差し出す。そしてすべてが一気に解決へと向う。

翌日から、我家の切迫した生活に新たな秩序が出来上がる。それはモクを含むすべての家族が心底喜んだ奇策であり、究極的な打開策でもあった。

ただ最後に、結果の内容を詳細に眺めると、大きな一つの変化が浮かび上がる。それはこの家の主と自負してきた私と、愛犬モクとの関係だ。

添い寝という重要な役割を期待されて担ったモクが、私の保持していた絶対

権力の一部を、自分の力で剥ぎ取ったということに他ならない。

「モク、よかったなあ。今の心境はどうだい？」

それに答える言葉をモク自身は持ち得ない。しかし、絶対権力の一部を奪われて喜ぶ、当人の私には相手の態度から聞こえてくる言葉がある。

（当たり前じゃないか。いつも、いつも世話ばかり掛けているより、この方がどれだけ居心地がいいか、親爺さんに分かるかい、・・・・・？）